

目次

1.平成 29 年度浦安市青少年海外派遣事業を終えて	1		
2.姉妹都市交流とは？	}		
3.浦安の姉妹都市～オーランド市～		}	
4.浦安市青少年海外派遣事業とは？			}
5.オーランドってどんなところ？			
6.平成 29 年度浦安市青少年海外派遣事業実施計画	4		
7.浦安市青少年海外派遣選考委員会の設置及び運営に関する要項	6		
8.平成 29 年度浦安市青少年海外派遣選考委員名簿	7		
9.平成 29 年度浦安市青少年海外派遣生名簿	8		
10.平成 29 年度浦安市青少年海外派遣生の選考	9		
11.平成 29 年度浦安市青少年海外派遣事業実績			
事業スケジュール、海外派遣中のスケジュール	10		
事前説明会(保護者参加)、第 1 回事前研修会、第 2 回事前研修会	11		
第 3 回事前研修会、OB・OG との交流会	12		
本研修			
3 月 7 日 (水)	13		
3 月 8 日 (木)	14		
3 月 9 日 (金)	15		
3 月 10 日 (土)、3 月 11 日 (日)	16		
3 月 12 日 (月)	17		
3 月 13 日 (火)	19		
3 月 14 日 (水)	19		
3 月 15 日 (木)	21		
3 月 16 日 (金)	21		
市長報告及び事後研修会、青少年海外派遣事業報告会	22		
12.派遣生報告書			
(1) 海外派遣全体を通して			
室井 翔輝	23		
湯山 拓海	24		
千田 ももこ	25		
佐藤 美羽	26		
垣内 優輝	27		
中村 夏花	28		
塩見 陽花	29		
濱田 萌衣	30		
渡邊 柚菜	31		
熊川 和香菜	32		
(2) ホストファミリーとの交流			
室井 翔輝	33		
湯山 拓海	35		
千田 ももこ	36		
佐藤 美羽	37		
垣内 優輝	38		
中村 夏花	40		
塩見 陽花	42		

濱田 萌衣	44
渡邊 柚菜	46
熊川 和香菜	48

(3) 内容別報告

URAYASU ナイト	佐藤 美羽	50
Dr.Philips 高校の授業参加	千田 ももこ	51
Orlando City Hall	佐藤 美羽	53
University of Central Florida	中村 夏花	55
Beardall Senior Center	渡邊 柚菜	57
Orlando Utilities Commission	垣内 優輝	59
Fire Department	室井 翔輝	62
History Center	熊川 和香菜	64
CANVS	千田 ももこ	66
Boys & Girls Club of America	湯山 拓海	68
Disney's Animal Kingdom	濱田 萌衣	70
Backstage Tour		
Kennedy Space Center	塩見 陽花	72

13.英語による日本紹介 各グループの発表資料

Group A	中村夏花、塩見陽花、濱田萌衣、渡邊柚菜	74
Group B	室井翔輝、垣内優輝、千田ももこ	76
Group C	湯山拓海、佐藤美羽、熊川和香菜	77

14.浦安市青少年海外派遣事業のあゆみ 79

1.平成 29 年度浦安市青少年海外派遣事業を終えて

平成 29 年度浦安市青少年海外派遣団
団長 溝上 澄人

平成 29 年度の「浦安市青少年海外派遣団」を代表し、関係者の皆様と、オーランド市の皆様に多大なるご協力をたまわりましたことに、心より感謝を申し上げます。

さて、この青少年海外派遣事業は、市内在住の青少年を姉妹都市オーランド市に派遣し、異文化体験や市民との交流を通して、本市の次代を担う若い世代の国際的な視野を広げ、国際社会を担う人材を育成することを目的に実施しているものです。

平成 29 年度は、派遣生 10 名、市随行者 2 名、添乗員 1 名の計 13 名で、今年の 3 月 7 日から 16 日まで、オーランド市を訪問し、ホームステイ、高校の授業体験や生徒との交流、施設訪問、日本文化紹介などを行いました。

オーランドでは訪問したすべての場所で、私たちは大変温かく迎えていただきました。

今回の青少年海外派遣を、自身の進路や、環境・高齢化などの日米共通の課題を考える機会としていただくため、大学、起業を支援する施設、高齢者が健康増進や仲間づくりを行う施設、環境保全に力を入れている施設などへの訪問を、本事業としては初めて盛り込みました。

また、今回の施設訪問では、派遣生がより一層能動的に学習できるよう、事前研修の段階で、レポートを作成する担当施設を割り当て、施設に関する事前学習や交流の準備を行うことで、現地で得るものはより一層大きくなったと考えています。

派遣生からは、提出されたレポートや、5 月 13 日に行った平成 29 年度青少年海外派遣報告会で、「多文化社会のアメリカで、様々な考えを持つ人と出会ったことで、今後、幅広い分野でチャレンジをしていきたいという気持ちが強くなった」、「自分たちで日本の文化を紹介して交流するイベントを行ったが、自分たちで企画・運営したプロセスは今後も生かせると思うし、文化交流イベントは、様々な場面で行えるといいと思う」、「大学で、義手や義足を研究・開発しているのを見て、大学、そして学生が社会に貢献しようとしている姿勢を見て感動した」など、様々な声が聞かれ、派遣生それぞれが多くのことを学び、これからの人生に生かしていこうとしていることが伝わってきました。

今回の派遣生がこの経験を生かして、更なる飛躍をされることを願うとともに、本市の、多文化共生社会のまちづくり、そして東京 2020 オリンピック・パラリンピックに伴う国際理解・交流の活動、姉妹都市交流、そして地域における交流にこれからも積極的に関わっていただくことを期待しています。

2. 姉妹都市交流とは？

姉妹都市のルーツは米国と言われています。第2次世界大戦終結後、本当の世界平和をもたらすには市民レベルでの交流が必要だと、米国のアイゼンハワー大統領によって提唱されました。さまざまな国の市民同士が友達になりお互いに理解しあい、協力しあうことが、ひいては国同士の相互理解と協力を結びついていくということが認識されてきたのです。

そしてこの運動の輪は世界中に広まり、本国米国だけでも1,100を超える都市が姉妹都市交流に参加し、日本でも約850の自治体が姉妹都市を持つにいたっています。

姉妹都市交流を通じて、私たちは異なった文化を持つ人々とのふれあいをより身近に体験することができます。この地球上には何千、何万という異なった文化があり、今やそれらは私たちの生活とは決して無縁であるとは言い切れない時代になっています。姉妹都市との交流は、私たちが真の国際人となっていく過程の第一歩であるとも言えるのではないのでしょうか。

3. 浦安の姉妹都市～オーランド市～

昭和62年から「浦安市国際交流協会」により姉妹都市の選定が始まりました。様々な勉強会や議論を経て複数の候補からオーランド市を選定した後、平成元年10月23日にオーランド市で、続いて平成2年1月27日に浦安市で姉妹都市協定の調印式が行われました。平成元年は浦安が村として誕生してから100年目にあたる記念の年であり、提携は浦安誕生100周年を記念する1大イベントとして祝福を受けることになりました。

4. 浦安市青少年海外派遣事業とは？

浦安市とオーランド市との姉妹都市提携を機に、青少年での交流を促進することを目的として、平成2年度より浦安市青少年海外派遣事業が実施されています。浦安市青少年海外派遣事業では、市内在住青少年をオーランドへ派遣し、ホームステイ、現地高校授業体験、市内施設見学、市庁舎訪問など、市民や青少年との交流を図っており、これまで24回、307名を派遣しました。

感受性豊かな時期に、外国の文化や習慣を実際に体験し、様々な交流を持つことで、国際的視野と豊かな国際感覚を身につけてほしいと考えています。

なお、青少年交流の他にも、スポーツ交流、学校交流、障がい者交流など様々な分野で交流が行われています。

5.オーランドってどんなところ？

アメリカ合衆国 フロリダ州オーランド市

位置：西経 81 度、北緯 28 度

オーランド市との時差＝日本時間－14 時間（夏時間の場合は－13 時間）

気候：亜熱帯性気候

年平均気温：22℃

面積：295.3 km²

人口：277,173 人(2016 年末)

市制施行日：1875 年 7 月 31 日

オーランドは元来、柑橘類などを中心とする農業で栄えた町でしたが、オーランド近郊にケネディ・スペース・センターやディズニー・ワールドができたことにより、急速に成長をはじめました。

市近郊には、ディズニー・ワールドのほか、ユニバーサル・オーランド・リゾート、シーワールドなど、いくつものテーマパークがあります。そのほかにも、100 を超えるゴルフ場やリゾートホテルが林立し、多数のショッピングモールもあります。

全米屈指の観光・保養都市として発展している一方、手つかずの自然環境も大切に、「シティー・ビューティフル（美しいまち）」を合言葉に、環境保全・自然保護にも取り組んでいる美しいまちです。

オーランド市の位置図



6.平成 29 年度浦安市青少年海外派遣事業実施計画

1. 目的 米国フロリダ州オーランド市との姉妹都市交流事業の一環として、本市在住の青少年をオーランド市に派遣し、ホームステイ、公共施設や教育機関の訪問等による異文化体験やオーランド市民との交流などをとおして、本市の次代を担う若い世代の国際的な視野を広め、国際社会を担うにふさわしい人間を育成する。
2. 主催 浦安市
3. 派遣期間 平成 30 年 3 月 7 日（水）～3 月 16 日（金）8 泊 10 日
4. 派遣先 アメリカ合衆国フロリダ州オーランド市
5. 派遣内容 市役所訪問、現地高校授業参加、ホームステイ、公共施設や教育機関訪問等
6. 派遣対象 下記の要件を全て満たす方。ただし、次の各号いずれかに該当しなくなった場合は、派遣決定を取り消す場合がある。
 - ①生年月日が平成 11 年 4 月 2 日から平成 14 年 4 月 1 日までである方
 - ②市内に在住している方（住民基本台帳に登録がある方）
 - ③派遣について保護者の同意が得られている方
 - ④心身共に健康で、協調性に富み、派遣計画にしたがって規律ある行動及び団体生活ができる方※派遣生として決定後、健康診断書（自己負担）を提出すること
 - ⑤事前研修、派遣の全行程、事後研修及び報告会に全て出席できる方
 - ⑥有効期限が平成 30 年 6 月 16 日以降であるパスポートを平成 30 年 1 月 9 日（火）までに用意できる方
 - ⑦世帯の中で市税等の滞納がない方
 - ⑧過去に本事業に参加したことがない方
 - ⑨将来も本市の国際交流、地域活動、派遣の成果を積極的に活かせる方
 - ⑩中学校卒業程度の英語基礎能力があり、簡単な会話ができる方
 - ⑪米国フロリダ州オーランド市の高校生が浦安に来訪した際に、ホームステイの受け入れができる方
 - ⑫市内における国際交流活動に積極的に協力できる方
7. 派遣人数 10 名（引率者は除く）
※原則、男女共に 2 名以上を派遣。ただし応募状況によってはこの限りではない。
8. 引率者 3 名（市職員 2 名、専用添乗員 1 名）
9. 参加費 1 人 金 120,000 円
※参加費に含まれるもの：
航空運賃、空港使用料、宿泊費、施設入場料、交通費、ツアーガイド料、公式行事中の食事代
※参加費に含まれないもの：
パスポート申請費用、ESTA 申請費用、旅行保険のオプション追加分
※ホストファミリーによっては、その他自己負担が生じる場合あり。
10. 応募期間 10 月 2 日（月）～10 月 17 日（火）午後 5 時必着
※窓口提出の受付時間は午前 9 時～午後 5 時。
※土日祝日を除く。

※郵送提出の場合は10月16日(月)消印有効。

(2) 提出先

市役所3階地域ネットワーク課

(3) 提出書類

①申込書・・・1通(写真貼付:たて4.5cmよこ3.5cm、上半身、脱帽、
3ヶ月以内に撮影のもので裏面に氏名を記入)

②承諾書・・・1通

③身上書・・・1通

※承諾書及び保護者の意見欄以外は、すべて本人が記載すること

(4) 提出書類配布場所

市役所3階地域ネットワーク課窓口及び市HP(<http://www.city.urayasu.chiba.jp/>)からダウンロード

11. 選考方法 選考委員会による選考

(別途 浦安市青少年海外派遣選考委員会の設置及び運営に関する要項参照)

12. スケジュール

年	月	日	曜日	実施事項
平成29年	9	15	金	募集記事 「広報うらやす」9月15日号掲載、市HPにアップ。 市内高校及び公共施設にチラシ配布
	10	2	月	応募期間
	10	17	火	
	10	19	木	第1回選考委員会 16:00~17:30 市役所10階 協働会議室 [主な内容] 趣旨・日程・応募状況・選考基準調整
	11	5	日	第2回選考委員会(選考会含む)9:00~14:00 市役所4階 会議室 [主な内容] 選考試験AM・結果確認及び派遣者決定PM
	11	26	日	事前説明会・第1回事前研修会 9:30~16:00 国際センター研修室 [主な内容] AM (保護者も参加) 事業概要説明・日程確認 PM 自己紹介・オランダでの発表グループ分け
	12	17	日	9:30~12:00 国際センター研修室 第2回事前研修会 [主な内容] オランダでの発表ドラフト提出・リハーサル
平成30年	2	18	日	第3回事前研修会及びOB・OGとの交流会 9:30~15:00 国際センター研修室 [主な内容] AM 結団式(市長表敬)・オランダでの発表 リハーサル・最終確認(パスポート・ESTA・保険・日程等) PM 平成29年度派遣生とOB・OGによる交流会
	3	7	水	オランダ派遣 (8泊10日)
	3	16	金	
	4	3	火	市長報告・事後研修会 9:30~12:00 市長公室・市役所10階 会議室 [主な内容] 市長への成果報告・レポート提出確認・報告会の説明
	5	13	日	青少年海外派遣事業報告会 9:30~12:15 国際センター研修室 [主な内容] 予行練習・公開報告会
	6			報告書発行

7.浦安市青少年海外派遣選考委員会の設置及び運営に関する要項

（設置）

第1条 浦安市青少年海外派遣実施計画に基づき、海外派遣生の候補者を審査し選考することを目的として、浦安市青少年海外派遣選考委員会（以下「委員会」という）を設置する。

（所掌事務）

第2条 委員会は、次の各号に掲げる事項を行うものとする。

- （1）青少年海外派遣生の候補者の審査、選考に関すること
- （2）前号に規定する事項に関し必要と認められるものに関すること

（組織）

第3条 委員会は、7人以内の委員をもって組織する。

（委員）

第4条 委員は次のとおりとする。

- （1）市職員
- （2）学識経験者
- （3）国際交流団体代表

（委員の任期）

第5条 委員の任期は、浦安市青少年海外派遣事業がその目的を達成するまでとする。

（委員長及び副委員長）

第6条 委員長は、浦安市市民経済部長をもって充てる。

- 2 委員長は、会務を総理し委員会を代表する。
- 3 委員会に副委員長1人を置き委員の互選によってこれを定める。
- 4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときはその職務を代理する。
- 5 委員長及び副委員長に事故があるとき、又は委員長及び副委員長が共に欠けたときはあらかじめ委員長が指定した委員がその職務を代理する。

（会議）

第7条 委員長は委員会の会議を招集しその議長となる。

- 2 委員会は、委員の過半数が出席しなければ議事を開くことができない。
- 3 委員会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

（報告）

第8条 委員会は、選考審査した海外派遣生の候補者を、すみやかに、市長へ報告するものとする。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は市民経済部地域ネットワーク課において処理する。

(補助)

第10条 この要項に定めるもののほか委員会の運営に関し、必要な事項は市長が別に定める。

附 則

この要項は、平成8年4月1日より実施する。

平成13年4月1日一部改正

平成17年3月22日一部改正

平成19年4月1日一部改正

平成26年6月5日一部改正

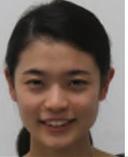
平成27年9月7日一部改正

平成29年8月22日一部改正

8.平成 29 年度浦安市青少年海外派遣選考委員名簿

1	委員長	浦安市市民経済部長 岩 島 真 也	市職員
2	副委員長	学校法人明海大学 ホスピタリティ・ツーリズム学部 ホスピタリティ・ツーリズム学科 教授 上 杉 恵 美	学識経験者
3	委員	浦安市市民経済部次長 青木 誠	市職員
4	委員	浦安市こども部次長 本 田 恭 代	市職員
5	委員	浦安市国際交流協会 会長 白 木 聖 代	国際交流団体代表
6	委員	浦安市国際交流協会 副会長 藤 本 信 幸	国際交流団体代表
7	委員	浦安在住外国人会 会員 伊 勢 佳 奈	国際交流団体代表

9.平成 29 年度浦安市青少年海外派遣生名簿

		氏名	学年	学校名
1		むろい しょうき 室井 翔輝	高3	私立慶應義塾高等学校
2		ゆやま たくみ 湯山 拓海	高1	私立専修大学松戸高等学校
3		せんだい ももこ 千田 ももこ	高3	私立郁文館グローバル高等学校
4		さとう みう 佐藤 美羽	高3	私立中央大学高等学校
5		かきうち ゆうき 垣内 優輝	高2	私立国際基督教大学高等学校
6		なかむら かな 中村 夏花	高1	県立松戸国際高等学校
7		しおみ はるか 塩見 陽花	高2	県立船橋高等学校
8		はまだ めい 濱田 萌衣	高2	私立国際基督教大学高等学校
9		わたなべ ゆな 渡邊 柚菜	高1	私立東京学館浦安高等学校
10		くまがわ わかな 熊川 和香菜	高2	私立秀明八千代高等学校

〔随行者〕

団長 地域ネットワーク課 課長補佐 溝上 澄人
 随行者 地域ネットワーク課 主任主事 關根 利恵
 専用添乗員 加瀬 史絵

10.平成29年度浦安市青少年海外派遣生の選考

選考委員会について

浦安市青少年海外派遣 第1回選考委員会

日時：平成29年10月19日（木）16：00～

場所：浦安市役所 10階会議室

- 内容： 1. 平成29年度浦安市青少年海外派遣事業実施計画について
2. 派遣生の応募状況について
3. 選考会について

浦安市青少年海外派遣 第2回選考委員会

日時：平成29年11月5日（日）9：30～

場所：浦安市役所 4階会議室

〈選考会〉

- 内容： 1. 受付
2. 選考（日本語による面接、英語のスピーキング試験）

〈選考会議〉

- 内容： 1. 選考会実施結果報告
2. 選考審査
3. 承認

選考の結果について	
公募期間 平成29年10月2日（月）～10月17日（火）	
応募者	21名
選考会参加者	19名
派遣決定者	10名

11.平成29年度浦安市青少年海外派遣事業実績

事業スケジュール

平成29年11月26日（日）	事前説明会（保護者参加）及び 第1回事前研修会
平成29年12月17日（日）	第2回事前研修会
平成30年2月18日（日）	第3回事前研修会及びOB・OGとの交流会
平成30年3月7日（水） ～3月16日（金）	★青少年海外派遣★
平成30年4月3日（火）	市長報告・事後研修会
平成30年5月13日（日）	報告会

海外派遣中のスケジュール

日程	主な内容
3月7日（水）	出発→オーランド国際空港着 空港にてホストファミリーと合流し、各家庭へ
3月8日（木）	<ul style="list-style-type: none"> ・終日 Dr.Phillips 高校授業参加 ・Dr.Phillips 高校でURAYASU ナイト
3月9日（金）	<ul style="list-style-type: none"> ・Dr.Phillips 高校授業参加 ・Orlando City Hall 見学 ・UCF 見学 ・Beardall Senior Center 見学
3月10日（土）	終日ホストファミリーと交流
3月11日（日）	終日ホストファミリーと交流
3月12日（月）	<ul style="list-style-type: none"> ・Dr.Phillips 高校授業参加 ・Orlando-OUC Solar Farm 見学 ・Fire Department 見学 ・Lake Eola & History Center 見学 ・History Center 見学 ・CANVS 見学 ・Boys and Girls Club of America 見学
3月13日（火）	<ul style="list-style-type: none"> ・Dr.Phillips 高校授業参加 ・Backstage Tour (Disney's Animal Kingdom) 見学
3月14日（水）	<ul style="list-style-type: none"> ・Dr.Phillips 高校授業参加 ・Kennedy Space Center 見学
3月15日（木）	オーランド空港発の飛行機に乗り日本へ
3月16日（金）	浦安市役所到着、解散



事前説明会（保護者参加）

日時：平成 29 年 11 月 26 日（日） 9：30～11：45

場所：浦安市国際センター 研修室

- 内容：
1. 主催者挨拶
 2. 自己紹介
 3. 姉妹都市の紹介
 4. 海外派遣の概要について
 5. 事務説明等
 6. 質疑応答



第1回事前研修会

日時：平成 29 年 11 月 26 日（日） 13：30～16：00

場所：浦安市国際センター 研修室

- 内容：
1. 団長挨拶
 2. 自己紹介
 3. 青少年海外派遣事業の目的説明
 4. アイスブレイク
 5. 浦安市・オーランド市についての学習
 6. グループワーク
 7. その他連絡事項



第2回事前研修会

日時：平成 29 年 12 月 17 日（日） 9：30～12：10

場所：浦安市国際センター 研修室

- 内容：
1. 派遣日程説明
 2. グループワーク（ネイティブスピーカーからの指導）
 3. その他連絡事項

第3回事前研修会

日時：平成30年2月18日（日） 10：00～12：00

場所：浦安市国際センター 研修室

- 内容： 1. 日程等確認
2. 結団式（市長表敬）
3. 出国にあたっての注意事項等説明
4. グループワーク（ネイティブスピーカーからの指導）
5. その他



OB・OGとの交流会

日時：平成30年2月18日（日） 13：15～15：00

場所：浦安市国際センター 研修室



本研修 平成30年3月7日（水）～3月16日（金）

3月7日（水）

出発→16：30頃にオーランド国際空港着



空港にてホストファミリーと合流し、そのまま各家庭へ



3月8日（木）

Dr.Phillips 高校授業参加（終日）



Dr.Phillips 高校でのURAYASUナイト

英語による日本文化紹介



日本文化体験



3月9日（金）

Orlando City Hall 見学及び市議会議員表敬訪問



UCF キャンパスツアー



Beardall Senior Center 訪問



3月10日(土)
3月11日(日)

ホストファミリーと交流(終日)



3月12日(月)

OUC(Orlando Utilities Commission) Solar Farm 訪問



Fire Department 訪問



Lake Eola & History Center 訪問



CANVS 訪問



Boys & Girls Club of America 訪問



3月13日(火)

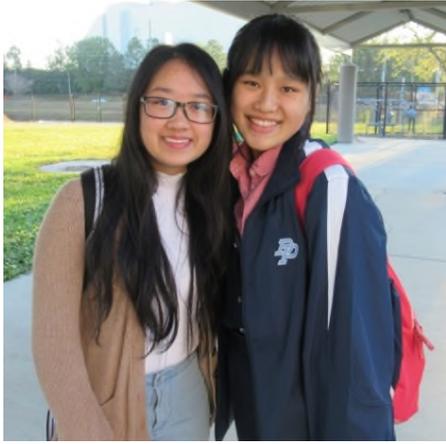
Disney's Animal Kingdom Backstage Tour 参加



3月14日(水)

ホストファミリーとのお別れ





Kennedy Space Center 訪問



3月15日(木)

7:00 オーランド空港発の飛行機に乗り日本へ



3月16日(金)

18:00 浦安市役所到着、解散



市長報告及び事後研修会

日時：平成30年4月3日（火） 9：30～12：00

場所：市長公室、市役所10階会議室

- 内容： 1. 市長への報告（出席7人）
2. 提出書類確認
3. 報告会の説明
4. その他



青少年海外派遣事業報告会

日時：平成30年5月13日（日）

場所：浦安市国際センター研修室

<報告会リハーサル> 9：30～10：45

<報告会> 11：00～12：15



12.派遣生報告書

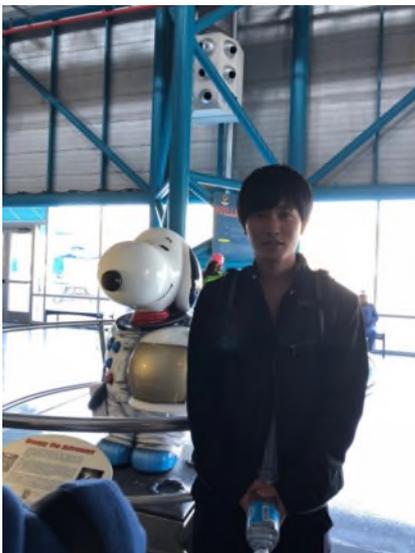
(1) 海外派遣全体を通して

室井 翔輝

今回、私は、浦安市青少年海外派遣事業を通じ、浦安市の姉妹都市であるアメリカのオーランドでとても貴重な体験をさせて頂くことができた。現地の高校生の家庭でホームステイにより異文化を経験したこと、日本ではあまり見ることのない施設を見学しその理念を学べたこと、様々な世代の方々と交流をしたことなど、その全てが大変刺激的な体験で、考えさせられることも数多くあった。

その中で私が一番強く感じたことは、自分自身の見識を広めることの必要性である。今までの私の人生ではあまりなかったが、多文化社会のアメリカへ行くとならずか10日間でさえ、様々な考えや趣味を持った人に沢山出会うことができた。そのことから今回、自分自身の教養の狭さを教えられた。まだまだ自分の知らないことが世の中には無限にあると知ることができた。振り返ってみると、私はこれまである特定の分野にだけ力を注いできた。しかし、勿論一つのことに取り組むのは大事なことであるが、その力だけではこの先の幅広い社会では足りないと思う。何事も様々な立場から視点を変えて捉え、いろいろな可能性を考えられるような、柔軟性のある思考力を手にしたい。そのためには新しい経験を積むことが必要不可欠であると強く感じた。この事業を機に、また大学生活も始まるので新しいチャレンジをし、造詣を深めたい。

高校生活の最後に、市の代表としてこの素晴らしい事業に携われたことを誇りに思う。支えてくださった方々に感謝し、この事業で得たもの、感じたものを胸に刻んで、よりよい人間になれるよう励んでいこうと思う。



私は今回のオーランド研修で主に3つ学んだ。まず1つ目は人の心は温かいという事だ。ホストファミリーに対し、1番その事を思った。アメリカは規模だけでなく、人の心も大きかった。絶対的な個人的空間である家に他人を招くのは怖く、ストレスも感じると思う。そんな中でもホストファミリーは色々尽くしてくれて週末も遊びに連れて行ってきて本当に優しかった。温かい心に触れられたのはホストファミリーに対してだけではない。市役所や発電所や消防署を回る中でその施設の説明を事細かに丁寧に教えてくれた現地の方々、その説明を通訳してくれた美貴さんと貴子さん、円滑な旅行実施に努めてくれた団長に關根さんに加瀬さん。様々な方に心から感謝の気持ちがある。皆の良心的な協力があって自分は様々な事を経験でき、学べた。

2つ目は日本語が大好きという事だ。英語が喋れなかったからというのが1番の理由だと思う。オーランドで日本語が聞こえた時の安心感と言ったら無かった。また、英語に比べ日本語は表現の多様性に長けていると思ったからだ。英語には無い言い回しなども多数あると気が付いた。加えて日本語は平仮名、片仮名、漢字の3つで構成されており、それらを無意識に使い分けているのも凄いと感じた。英語と関わったお陰で我が国の言語についてもより考えさせられた。英語以前に日本語でもまだ知らない言葉があったりする為、まずは日本語を完璧にしようと思った。母国語への完全なる理解がある上で英語を勉強しようと思った。

そして最後はありきたりだが、英語の重要性についてだ。私はオーランド研修中、1度も英語を満身に話せた記憶が無い。ホストファミリーが簡単な英語を使い、配慮してくれていたがそれでも聞き取る事に精一杯だった。また、質問に対しての答えも不完全なセンテンスであった為、ホストファミリーに迷惑をかけたとも思う。日本人のくせに日本の文化を正確に伝えられなかったのも情けなかった。英語を今以上に勉強し、コミュニケーションの幅を更に広くしていきたいと猛烈に感じた。



私が派遣事業を通して学んだことは主に3つある。1つ目は、身の回りのことは自分で責任を持って慎重に行動するということである。2つ目は、常に感謝をし、感謝の気持ちを言葉で伝えるということだ。最後に、自分自身を認め、自分らしく思い切りその場を楽しむということだ。これら3つの研修で習得したことは、一見容易に思えることではあるが、徹底するということは難しく、努力を要することである。だからこそ、私自身、これからの海外での大学生活や私生活で徹底することで、異なる価値観の人々との関係を良好に築き、様々な事に臆することなく挑戦し、そこでの学びを吸収し、体得した学びを他人の役に立てるようにしたい。

1つ目と2つ目は、自分自身の失敗に基づいた教訓である。1つ目は、飛行機にパスポートを忘れてしまったことから、物事に対し優先順位をつけ、常に考えて行動することの重要性を痛感した。2つ目は、感謝すべき人に感謝の気持ちを伝え忘れてしまったことからだ。そのことから、過去の自分自身を振り返ってみると、感謝の気持ちを持っていたとしても、伝えていないこともあったため、感謝の気持ちを伝え、相手に対し、寂しいという感情を与えることのないように、また自分自身も感謝を伝えられないというような不完全燃焼の状態に陥らないようにしていきたい。

さらに、これら2つの教訓を学ぶと同時に、失敗という経験は、自分自身にとっての大きな財産になるということを感じることが出来た。

3つ目の教訓は、環境が異なることから、自分自身の居場所が感じられなくなってしまった際に学んだ。価値観も異なり、また言葉も日本語のように話せないことから自分の存在を主張することが出来ず、苦しんでいたことがあった。しかし、その際に、日本人という誇りを持ってアメリカ人にはないものを持っていると自分自身を認め、またアメリカ人の価値観を自分も習得する気持ちでその場を楽しむことが大切だと身を持って経験した。

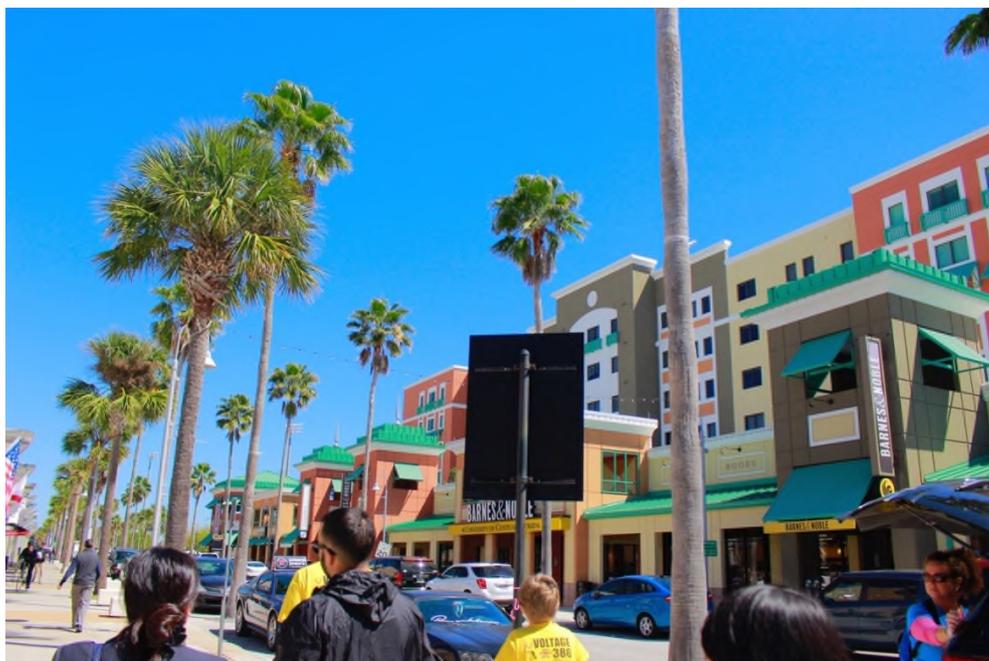


私は今回の派遣事業を通して自分の意見を他の人に伝えようとする大切さを学んだ。アメリカと日本は、文化も言葉も大きく違う。私は過去に二度アメリカへ旅行した経験があるが、日本人が多く訪れる有名な観光スポットのハワイとグアムだったので、本土に訪れたのは今回が初めてである。

私が派遣事業の中で驚いたことは、本土のネイティブスピーカー、特にティーンエイジャーの話すスピードだ。私は、日本人向けに作られていて非常に丁寧にゆっくりと話してくれるリスニング教材ですら、何度かリピートされないと聞き取れないことが多くある。しかし、ネイティブスピーカーとの会話は当たり前だがリピート再生できない。その場で会話できる時間には制約があるし、お互いに多くの情報を交換し合うためには、いつまでも同じ話題に踏みとどまるわけにもいかない。何か伝えたいことがあっても、とっさに言葉にできないもどかしさを感じることも一度や二度ではなかった。

しかし、オランダに滞在して沢山のひとと触れ合ううちに、「他の国の言葉で何かを伝える時は、文法の正確さよりもいかにコミュニケーションを楽しむかが大切だ」という事に気付いた。相手の表情やリアクション、声のトーンなど、生のコミュニケーションでこそ生きる要素があるのに、それらを英語力の無さを言い訳にしてないがしろにすることは、とてももったいないと感じた。これは外国人と話しているときに限った話ではない。

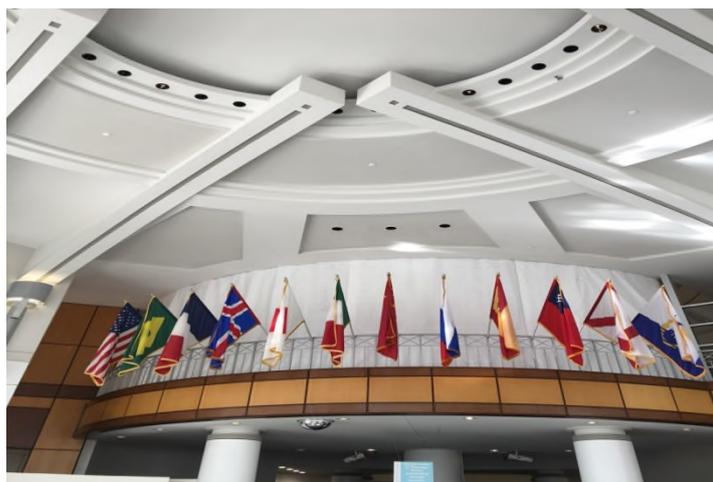
なので、この経験を生かして、目の前にいる人とのコミュニケーションの大切さを周囲の人にも伝えていく上で自分も忘れないようにしたい。



海外派遣全体を通して

垣内 優輝

私は、この青少年海外派遣で色々なことを学んだ。中でも特に深く思ったことは、「自分の見ている世界はとても小さい」ということだ。この派遣で初めてのものにたくさん触れたり、たくさんの人と話して、自分が初めて知る考え方やものの見方、自分が知らなかったことをたくさん知ることができた。



例えば特に印象に残っていることは、ホストファミリーや学校の人、交流で話した子供達に「日本ってどんな国か」とよく聞かれたことだ。私は、日本はアメリカと仲がよく、他の国にも認識される国だと思っていた。でも実際アメリカに行ってみると、日本がアジアということを知らなかったり、日本と中国が違う言葉で違う国ということすら知らない子供達も多いし、日本が全然知られてない、数あるうちの小さな国なのだと思い知った。そして、そんな小さな世界だけで生きていて、自分が見ているものは本当に世界のたった一部だと実感した。私たちは日本で暮らしているけど、日本で当たり前、自分にとって当たり前前は本当に狭い限られたことだと思った。

この経験を通して活かしたいことがある。よく「視野を広げる」と言うけれど、一番大事なのは、いろんなことに興味を持つことだと思う。それは海外に目を向けようということでもあるけれど、きっともっと身近なところからできることだ。例えば、ニュースを携帯や電車のテレビで少し観たり、ふと気になったことをすぐに調べたり、話題の本やお勧めの漫画を読んだりすること。そんな少しのことでもっと多くの人と共通の話題になったり、新しい発見をしたり、好きなことで繋がれたり、関係のないようなことがつながるのだと実感した。だから私は自分の引き出しを多く持ってたくさんの人とつながれるように、色々なものに興味を持って常に学び続けたいと思う。

私はこの海外派遣でオーランドに行くことをとても楽しみにしていた。この海外派遣で特に心に残ったことは2つある。

1つ目はホストファミリーとの交流だ。ホームステイは初めてで、この海外派遣の中で1番楽しみにしていた。初めてホストシスターのアレックスに会った時、お互い緊張していてまともに話せなかった。毎日一緒に過ごしているとお互いのことがわかってきて、くだらないことを話したり、たくさん笑い合うことができた。様々な施設をまわって帰ると、その日の施設がどうだったか、感想をととても興味津々に聞いてくれたのがとても嬉しかった。ホストシスターとディズニーに行ったりドライブしたりショッピングしたりたくさんの思い出ができた。

2つ目は派遣生と過ごしたちょっとした時間である。主に移動のバスやみんな泊まったホテルである。移動のバスでは席が近い人とおしゃべりしたり、寝てる人の寝顔を撮ったりしていた。おもちゃのゴキブリを投げてびっくりさせたり、怖い話をしたり、私は移動のバスでみんなと距離が縮まって仲良くなれた気がする。最終日に泊まったホテルではご飯の後みんなホテルにあったプールで遊んだ。外にあるプールだったので少し肌寒かった。プールの後は何人かで1つの部屋に集まって恋話や、10日間の思い出などを朝までずっとおしゃべりした。話していたらあっという間に朝になっていて驚いた。

この海外派遣を通してアメリカのことを知れたのはもちろん、人の暖かさや優しさも学ぶことができたと思う。英語をもっと頑張りたいというモチベーションが上がった。また、今までやったことないことに積極的に取り組んでいきたいと思った。



オーランドでの時間は本当にあっという間に過ぎていってしまった。とにかくやること全てが楽しく、良い刺激を与えてくれたので、この派遣事業に参加出来て良かったなと思った。様々な施設をまわったことで、アメリカやオーランドについて様々な視点から学べて面白かったし、勉強になった。起業する人が多かったり、授業ではみんながどんどん質問や考えを言っていたりと、その自由さと意志の強さが本当に素敵だと思った。

また、ホストファミリーとだけでなく、今回の派遣でなければ交流できなかった人々とコミュニケーションをとれたことが楽しかった。子供たちはエネルギーがすごくて可愛かったし、老人ホームの方々はとても優しく迎えてくれたので、あまり緊張せずにコミュニケーションをとることができた。みんなが日本に興味を持って話してくれたことが嬉しかった。

しかし、浦安でもオーランドという姉妹都市があるということを知っている人が少ないように、浦安についてはやはり知らない人が多いようだった。このような派遣事業を通してお互いに認知度が上がればいいなと思う。

現地の人々との距離が近い、というのがこの派遣の魅力の一つであると感じた。行く前はただ憧れていただけの場所を、より身近に感じられたことが嬉しかった。派遣事業を通して、アメリカの文化に対する驚きや、英語が上手くできない悔しさ、逆にちゃんと会話ができる時の嬉しさなど、色々なことを感じた。多くのことを吸収して、少しではありますが自分の視野を広げること出来たと思う。

しかし、今回の派遣は8泊10日という短い期間だったので学び足りないことだらけだ。海外には私の知らないことだらけだということも実感したので、今後自分で海外に行く機会を得て、自分の知らないことについてどんどん学んでいきたい。

最後に、ホストファミリーを始め、オーランドで交流した人々、派遣事業中にお世話になった方々、そして派遣団のみんなとのたくさんの素敵な出会いに感謝し、派遣事業で得られたことを無駄にしないようにこれから頑張っていきたい。



今回の派遣ではアメリカを普段とは別の角度からみることができた。現地の日常に紛れ、観光では訪れ得ない施設を巡り、フロリダに内側から触れられた。この派遣の中では大きく分けると3つの出会いがあった。海外派遣メンバーとの出会い、Dr.Philips High School での出会い、訪れた施設での出会いである。メンバーの9人とは短い間で絆を築き、自分にとって新しいコミュニティを見つけた気分だ。同じ浦安市内に住みながらも異なる高校生活を過ごしていた10人を繋げてくれたきっかけが青少年海外派遣となった。

Dr.Philips High School での現地高校生との交流は、私にとって刺激的なものだった。日本とアメリカでは同じ高校生でも似ているようで全く異なるライフスタイルを送っているのだ。Dr.Philips の学生は車で通学、毎日多量の課題に追われ、ホワイトボードはデジタル、生徒会主体のイベントや授業内でのプレゼンも多く、一般的な日本の学生と比べ能動的な学校生活を送っているように見受けられた。ホストシスターを始め現地高校生徒のみんなは、私達のことをゲストとして快く受け入れてくれた。親切に声をかけてくれた生徒が多く、高校内で人種差別を感じることは無かった。これはもともとアメリカが人種の多様な国である上に、国内で人種差別をタブーとする風潮があるからであろう。

英語に関しては、日常会話では不自由しなかったが、会話中にもっと掘り下げたいと感じたトピックを英語で広げることが出来ず悔しい思いをした。簡単な英単語を組み合わせて自分の言いたい事を伝えるというのはもちろん大切だが、根本的にボキャブラリーを増やすことが必要だと感じた。現地で出会った人の中で最も気づきを与えてくれたのは Dr.Philips の高校生だ。

施設の方々は、それぞれが自分の職に誇りを持っているように見えた。また、Beardall Senior Center で出会ったみなさんがとても元気で驚いた。施設内でもダンス教室が開かれていたり、お互いコミュニケーションを楽しんで取っていたりと活気に溢れていた。活気といえば Boys and Girls Club of America のみんなだ。自分達よりも年下の子供達が多く、素直で威勢が良く、高校生とはまた違った刺激を与えてくれた。オーランドは広々とした土地に恵まれて、老若男女問わず活気溢れる街だった。



この研修を通して私は沢山のことを学んだ。しかし、“学ぶ”ということよりも“楽しかったこと”のほうが多い気がする。

最初は、「自分はネイティブの方と会話なんかできるわけがない」と、後ろ向きなことを考えていた。しかし、実際にコミュニケーションをとってみると、たとえ間違っていたとしても、自分のホストファミリーやホストシスターの友達は、聞こうとしてくれた。私はその優しさに何度も助けられた。話が伝わったときの喜びや一緒に笑いあった事を未だに覚えている。思い出すと鳥肌がたつくくらいだ。今でも彼らとは連絡をとる仲だ。私は言葉の壁があったとしても、“気持ちは伝わる”ということを知った。



そして、派遣メンバーと過ごした時間はとても大きいものとなった。彼らの存在があったからこそ、この研修はとてもいいものになったのだと思う。みんなは、優しく面白くて離れるのが凄く悲しかった。絶対に、彼らと過ごした10日間を忘れない。

私が1番印象に残っているのはBoys and Girls Club of Americaだ。小さい子とコミュニケーションをとることはもともと好きだったので楽しみにしていた。訪問してみると、思ったより子供たちからの質問が難しく、混乱した。その時、一人の男の子に「You can't speak English.」と言われたのを今でも鮮明に覚えている。「子供って素直だな。」と思いながら少し悲しい気持ちにもなった。このとき、「もっと英語を話せるようになってみんなを驚かせてやる！」と逆に火がついた。もう少し、自分の英語力が高まったら、また、フロリダで出会えた方々と会いたい。

今回の派遣事業において、個人的な旅行や留学では体験できない様々な貴重な経験をさせていただいた。また、今まで気付かなかったような発見ができ、視野を広げることができたと感じている。

例えば、大学生が太陽光発電発展のために地域に馴染む太陽電池の新たなモデルを考案し、優秀作品が実際に製作される予定であることや、セントラルフロリダ大学では生徒が作った義手や義足を子供たちに寄付するという活動が今では企業がビジネスとして行っているほど発展していることを知り、学生たちの行動が反映されやすい風土だと感じた。私たちがホストファミリーに向けて日本の紹介を行う URAYASU NIGHT においては、プレゼンテーションとパフォーマンスの内容を自分たちで考え、練習を重ねた甲斐があり、達成感を得ることができた。

今回の派遣事業で充実して過ごせたのは、長年からの信頼できる姉妹都市間の関係や、貴子さんや美貴さんを始め、携わってくださった全ての方々の細かな配慮、そして地域ネットワーク課の皆さんの協力や団長、關根さん、加瀬さん、メンバー全員の努力があるからだと思う。メンバーとは出発前は仲良くなれるのかとても心配だったが、10日間で心に残る思い出をたくさん作ることができた。派遣事業が終わっても関わっていきたいと思える仲間だ。

改めて皆さんに本当に感謝したい。派遣団のみんなもありがとう。一生の宝物になった。



(2) ホストファミリーとの交流

室井 翔輝

オーランドでの研修では、ホームステイという形で Walker 家の皆さんのお宅に8日間ほどお世話になった。Walker 家は高校生の Bryant、お父さんの Fred さん、お母さんの Thea さん、お姉さんの Hailie さんの4人家族である。

Bryant は初めて空港で会った時から、手を振り笑顔で沢山話しかけてきてくれ、とても気さくな高校生である。私がかうまく英語で表現できない時も、わかるまでなんども聞いてくれるような優しい人で、常に紳士であった。彼は、私や彼の友達、また見ず知らずの人にも常に気を配ることのできる寛大さを持ち、見習うべき点がいくつもあるように感じた。

特に驚いた点としては、精神面での成熟具合である。これはアメリカの高校生全体にも言えることで、誰もがそれぞれ自分の将来のことを設計しており、しっかりとした考えも持ち合わせている。ホームステイ中に何度か Bryant とその友達とご飯を食べることがあったが、お店のテレビで、先日起きた事件に関連し銃規制のことが報道されると、彼らは真剣にそのテーマの話し合いを始めた。意見が分かると相手の意見を理解しつつも、各々の意見をしっかりと説明し説得しようとしていた。これは普段から世の中のことに関心を持ちしっかり考えていなくてはできないことで、子供だからといって社会に目を背けるようなことはしない。また、高校の授業を見学した際、ディベートが行われていたが、その時も全員が度々手をあげ考えを訴えていた。日本の高校でもディベートを行うことはあったが、取り組む真剣さが違うように感じられた。

何故これほどまでの差ができているのかを考えてみると、Bryant はもうすでに自立をしていることに気づいた。例えば、彼は自分の車を持っているので自由に何処かへ行くこともできるし、自分で洗濯や掃除をし、朝も自分でご飯を作るのがほとんどであった。もうすでに大人のように何から何まで自分でやりくりし生活をしていることは、尊敬すべき点である。

Walker 家で生活させていただいてもう一つ大きく驚いた点は、親戚との親密さである。普段はそれぞれパーソナリティを持つが、連絡を欠かさない。ホームステイ中は何度も電話をかけ話しているのをみだし、放課後には Bryant のお祖父さんとお祖母さんのお家に何度か遊びにいった。普段からよく家へ行き、会って話をしていると聞いた。

また、ホームステイ中にお姉さんの誕生日が近く、パーティーを開いた際も、親戚が十五人ほど集まり盛大に祝っていた。本当に楽しそうに過ごしていて親戚との仲の良さがまじまじと伝わってきた。終わった後も、皆でお祖父さんとお祖母さんの家へ行き、肩を揉んだり足にクリームを塗ってあげたりと、アメリカでは家族や親戚を日本より一層いたわり、人と人との関係をととても大切にしているように思えた。

今回 Walker さんの家庭でアメリカの文化を経験させて頂いたことで、日本とは異なる点を知ることができ、また同時に日本の文化を客観的にみることがで

きた。しかし、どちらかの文化が悪いというものではなく、日本もアメリカもそれぞれが良さを持っていると良くわかった。そして何より、このホームステイで得られた宝物は、第二の家族である。浦安から1万 km 以上も離れた場所で、こんなに優しく温かい人たちに出会え、「あなたは私たちの家族だ。」といってもらえたことは胸にしみる本当に嬉しい言葉であった。短い期間ではあったが、沢山のものを得、本当に感謝の気持ちでいっぱいである。



ホームステイで感じた事は4つある。1つ目は食べる量に差があり過ぎるという事だ。アメリカの方達は本当によく食べる。これはホームステイ中、唯一毎日感じていた。昼食が要らない日でもフルーツとスナックを用意してくれた。しかし、私はそれらをしっかりと食べ切れた日は無かった。ホストファミリーへの罪悪感と自分への嫌気ですぐにかなりそうだった。

2つ目は学校への登校の仕方についてだ。アメリカでは16歳以上で車の運転免許が取得出来る為、ホストファミリーの子供は車で高校に登校していた。アメリカでは車で登校するのが当たり前だと分かった。日本では車の運転免許の取得可能年齢が18歳からの為、当然我々学生は電車で高校に通っている。文化の違いが顕著に表れていた点だと思う。

3つ目は学校の授業についてだ。実際に授業に参加してみて多数の違いを知る事が出来た。アメリカはよく聞くが本当に自由だった。授業中の立ち歩き・私語・飲食は許されており、教師が注意する事は無かった。日本では授業中に飲食をしようものなら注意を受け、立ち歩きと私語も必要最低限の時以外は禁止されている。アメリカと比較すると、日本は規則に縛られ、息苦しい学校生活だなと感じざるを得なかった。また、日本では教師と生徒という関係性は絶対的なもので余程、互いの信頼関係が無ければ距離は近くはないだろう。だが、アメリカでは教師と生徒は一定の距離感を保ちながらも友達のように仲が良かった。その事もあってか授業中も沈黙は無く、教師と生徒達で授業を「作り上げている」感じだった。どちらも「やらされている」という受動的態度は見受けられず、能動的に授業に参加していた。日本はもっとアメリカの学校の実態を知り、それを参考に改革していくべきだなと生意気ながら感じた。

最後4つ目は女子との交流についてだ。アメリカは男女の壁が無く、フレンドリーな人が多かった。ホストファミリーの子供もその内の1人で研修中に1度、女子2人のご飯に私も参加する事があった。まず、女子2人とご飯に行ける事に対して驚きを感じた。私は女子をご飯に誘える勇気もルックスも持っていない。そして、誘った所で断られるのがオチだろう。また、私のホストファミリーの子供は女子2人とご飯に行った後、母が運転しているとは言え、彼女達を車でそれぞれの家の前まで送っていた。尊敬と感嘆の念を強く感じた。ご飯に行くだけでなく、その後も安全面に配慮し、しっかりと送ってあげる。紳士的な振る舞いに抜かりがなかった。私と同年齢とは思えなかった。この歳で女子にここまで行動を起こせるとなると将来の恋愛に対しても不安を感じないのだろう。ホームステイ中に紳士的態度についても学ぶ事が出来て良かった。

私のホストファミリーの家族構成は、父、母、長女、双子で、ホストファザーがケニア出身の方だったことから、アフリカ系の教会に通っていた。また、子供に対するホストペアレンツのしつけも比較的に行っている方で、家族の時間を大切にしている家庭だった。私自身、宗教はないため、日本では教会に行ったことがなく、ニュージーランドに留学した際に行った教会をイメージしていたが、アフリカ系の教会も似ていて、歌や教会の人の話を含めて3時間位だった。しかし、一般的な教会は1時間など、決まった時間に始まり、そして終了するそうだった。アフリカ系の人々は訪問者を好む傾向にあるようで、初めて教会を訪れた私に対しても、はっきりなしに話をかけてくれた。私が教会で学んだことは、自分が発する言葉・心の持ち方は人生において重要であり、それらが人生の質を決めるということ、人々が大切にしなければならないのは、家族の安全と様々なコミュニティに参加し、責任を持つこと、そして自分の信念を貫くことだ。

また、夜ご飯は、皆揃って必ず食べ、ホストファザーも仕事場から隙間時間がある度に家族に電話をし、家族が何をしているのか気にかけて、家族を大切にしているようだった。個人的に日本はこのような傾向はあまりないと感じる。帰宅時間が遅く、父以外で食事という家庭も多く存在し、また職場では関係のないことはしないという傾向も強いと感じる。

だからこそ、私自身、家族との時間を大切にし、自分の行動に責任を持って、前向きに将来に向かって常に全力で日々前進していきたい。

ホストファミリーとの生活で強く印象に残っているのは、ホストファミリーの優しさ、彼らが私を家族の一員として受け入れてくれたことである。私がホストファミリーに学校での悩み事を相談した際も本当の娘のようにアドバイスをくれ、異文化での生活の中でも楽しむことが出来たのは、彼らの支えがあったからだ。彼らの心遣いに心の底から感謝すると同時に彼らの助けがなくても異文化の中で自分を貫けるように強く生き、物事を解決できる人になりたいと強く感じた。さらに、私のホストファミリーは、日本という国や私自身に興味を示し、毎日私のことを気にかけてくれ、私を家族の一員として受け入れてくれた。また、彼らの時間を犠牲にしてオーランド市を楽しませてくれた。様々な場所に連れて行ってくれ、目に映る景色は、全て映画の中にいるようで毎日が夢のような空間であった。消防署の車や家、道路、標識、お店、全ての建物の色合いや構成に手が込んでおり、オーランド市のクリエイティブな空間を肌で感じ、鳥肌が立つことも日常茶飯事であった。

このような景観からも文化の違いを強く感じ、自分がいる場所もさらにクリエイティブな空間にする為に創造していきたい。

私のホストファミリーは、言葉も不自由で何も分からなかった私に本当に親切に接してくれた。私が初めてオーランド空港に到着し、ホストシスターである Kendall と彼女の友達 honnah とホストマザーに会った時、ミニーマウスのカチューシャのプレゼントをしてくれ、ハグをしてくれた。(後から Kendall に、貴方がメッセージでディズニーが好きだと言っていたからディズニーのカチューシャをプレゼントした、と言われた)

その後、時差ボケも吹き飛ばすテンションでピザ屋へ行き、日本時間の真夜中 3 時に信じられない程大きいピザを食べさせてもらった。食べ終わってお金を払おうとすると、NO と止められ、「貴方はゲストだからいいの!」と言われた。この後の食事もホストファミリーと食べた外食は全てホストマザーが払ってくれた。嬉しい反面、とても申し訳なかった。

ホストファミリーの家は閑静な森の中にあり、お伽話にでてきそうなどとても可愛らしい家だった。私に与えられた部屋はとても広く、部屋の中に専用のレストルームや洗面所、テレビもあった。私は日本からホストファミリーに沢山のお土産を持って行った。中でも Kendall は自立するペンケースと消えるボールペンを気に入ってくれた。日本食が好きだと言っていたホストマザーは、たたみのりを喜んで食べていた。そして、Kendall の家にはもう 1 人可愛い家族がいた。猫のジャッキーである。Kendall やホストマザーとの会話もとても楽しかったのだが、2 人の会話の英語が難しくてわからないときはジャッキーと遊んでいた。ジャッキーはホームステイ中の心の支えだった。

Kendall は事前のメールで約束していた通り土曜日にディズニーワールドのマジックキングダムに連れて行ってってくれた。その時ホストマザーが日本人の友達を誘ったらどうか、と提案してくれたので、派遣生のももこも一緒にディズニーに行くことができた。マジックキングダムは日本の東京ディズニーランドにそっくりで、ホーンテッドマンションやスプラッシュマウンテンは、そっくりどころか全く同じ内容だった。日曜日はホストマザーにユバサーサルスタジオのシティウォークに連れて行ってもらい、和香菜と彼女のホストシスターの Emma ともショッピングを楽しんだ。他にも私のホストファミリーは平日の放課後にディズニー Springs やアウトレットモール、スムージー屋さんやパンケーキ屋さんにも連れて行ってってくれた。ホストファミリーと過ごす最終日の夜には日本でまだ公開されていなかった COCO(リメンバーミー)を見た。日本語字幕がなく、観る前は話を理解できるか不安だったが、英語字幕でなんとかなった。

ホストファミリーとのお別れの朝、泣かないと決めていたのに不覚にも泣いてしまった。ジャッキーとの別れも想像以上に辛かった。別れた後ようやく泣きやんだ時にホストマザーから携帯にメッセージが届き感動してまた号泣した。私がこんなに充実した 10 日間を過ごせたのは、こんなに素敵なホストファミリーがいたからだ。もしホストファミリーが日本に来ることになったら、今度は私が素敵な場所に沢山案内したい。

ホストファミリーとの交流

垣内 優輝

私のホストファミリーは、お母さんと Justine と妹の3人だった。Justine はラクロスで放課後もよく試合があり、妹はヴァイオリンやサッカーをしていた。お母さんはスペイン語が話せて、たまにスペイン語も教えてくれた。3人共とても優しく、ゆっくり喋ってくれたり、たくさん質問をしてくれたおかげで楽しく会話をする事ができた。私の拙い英語でも、自分なりに積極的にしゃべったり言い方を変えてみたり、相手もゆっくり喋ってくれたり簡単な表現をしてくれたり、お互い理解しようとするれば分かり合うことができるのが嬉しかった。しかし、家族内や学校での友達同士の会話や話が盛り上がった時など、会話が速かったり、質問がわからないことがたくさんあり、もっと英語ができたらもっと深い友達になれたらだろうなと強く思った。



特に印象に残ったことを紹介する。

まず1つ目は、みんなが色々なものをすごく受け入れるということだ。例えば、初対面でも笑顔で話してくれたり、知らない人でも色々な所で日本から来たという歓迎してくれたり、友達や近所の人や親戚に私を紹介してくれたり、日本のものを学ぼうと用意してくれたり、プレゼンで反応してくれたり、みんなが自分と違うものをすごく歓迎して積極的に受け入れることが当たり前なのだと感じた。

2つ目は宗教のことである。ホストファミリーはカトリックだった。家に着いて初めの方に、宗教はあるか、と聞かれるくらい宗教が普通に生活の一部なの

だなと思った。ご飯の前のお祈りや金曜日はお肉を食べないとか、日曜日の厳かで明るい雰囲気のお祈りや、緑の服を着る St.Patric Day など新しいことをたくさん知った。キリスト教以外にも、ムスリムの人用のモスクもあるのも印象的だった。

3つ目は遊びのこと。アメリカでも楽しいことは共通だなと思った。例えば、子供達は普通にサッカーやラクロス、バスケなどで体を動かすし、実際に一緒にミニゴルフを楽しんで、スポーツは世界共通だと実感した。他にも、お互いの国のカードゲームで遊んだりした。

最後は日本との違いについて。例えば学校や部活も全然違うし、土曜日もあるという、日本人はやっぱりよく働くねと言われた。実際に、アメリカでも休日に部活もあるが、毎日ではなく、朝はとってものんびりしていた。Justine と2人で日本とアメリカの違いの動画を観たり、他にもたくさん気付いたことがあって刺激的で楽しかった。

こんなに良くしてくれたホストファミリーにすごく感謝しているし、日本に来たら同じようにおもてなしをしたいと強く思ったし、ずっと関係を切らさないで、もっと英語ができるようになって、もっといい友達になりたいと思う。また、自分がされたのと同じように、街で困っている外国人を見つけたら声をかけて助けになればいいな、と思うようになった。本当にこの1週間は短いけれどとても貴重な体験だった。



私はオーランドに行く前からホストシスターのアレックスと連絡を取り合っていた。お互いがシャイであることがわかって、オーランドの空港で初めて会ったとき緊張であまりうまく話すことができなかった。なので、仲良くなれるか少し不安だった。毎日一緒に過ごしているうちに、好きな曲や趣味のことでおしゃべりしたり、おもしろいYouTubeの動画の見せ合いをしたり、どんどん仲が深まって行って、すごく嬉しかった。

学校が休みの土曜日と日曜日は、ホストファミリーと1日中一緒に過ごした。土曜日はアレックスと派遣生2人と2人のホストと合計6人でウォルトディズニーワールドのマジックキングダムへ行った。アメリカのディズニーは初めてで、パークの広さ、チケットの値段、アメリカの人々のテンションやフレンドリーさ、など驚いてばかりだった。マジックキングダムは日本の東京ディズニーランドに似ていた。日本で3大マウンテンと呼ばれている、ビックサンダーマウンテン、スペースマウンテン、スプラッシュマウンテンがあり、日本にあるアトラクションもいくつかあった。アレックスの友達とも仲良くなれたし、たくさん話すことができ、とてもいい1日を過ごせた。

日曜日はホストファミリー、マザー、アレックス、ブラザーと一緒に湖に行ってボートに乗った。そのボートは自分で持っているものだと聞いてとても驚いた。湖はとても広く、天気がよくて、風が気持ちよかった。音楽を流しながらボートで話したり、写真を撮ったり、楽しかった。ボートのあとはマザーがお昼ご飯にパエリアを作ってくれたので、みんなで一緒に食べた。とてもおいしかった。ホストシスターは日本のことに興味があったので、日本について話すことがたくさんあった。日本に興味がある方はたくさんいると思うし、伝える場面が増えると思ったので、他の国の文化だけでなく自分の国のことをもっと知るべきだなと感じた。お互いわからない言葉を教え合ったり、とてもいい勉強になった。

ホストファミリーと過ごす最後の日の夜、レストランに連れて行ってくれた。思い出や今後のことなどたくさんのお話を話した。

ホストファミリーとの別れの日、楽しかった10日間の思い出が一気に蘇って、すごく幸せな10日間を過ごせたなと実感した。別れるとき、本当に楽しかったので帰りたくなくて、別れが寂しすぎて泣いてしまった。涙は全然止まらなくて移動のバスのなかでもしばらく泣いていた。

たった10日間という短い時間だったけど、こんなにも充実した日々を、国境を越えて過ごせたのは、本当に素晴らしい経験になったと思った。

ホストファミリーが暖かく迎えてくれて、優しく接してくれて本当に嬉しかった。これからも連絡を取り合っていきたい。また絶対に会いたい。



ホストファミリーとの交流

塩見 陽花

ホストファミリーとは事前に連絡を取り合っていたけれど、私はやっぱり実際に会うことに緊張していた。しかし、ホストファミリーはみんなとても温かく歓迎してくれて、本当に楽しく過ごすことが出来た。ホストマザーとホストファザーはベトナムの出身らしく、部屋の飾りや食事、言語などからベトナムの文化も見ることが出来た。ほとんどの料理に自分でチリソースをどんどんかけているのは本当に驚いた。お母さんはあまり英語が得意ではないらしく、家族の会話ではほとんど英語を話さずベトナム語を話していた。みんなベトナムとアメリカ、両方の名前があるということを知り、日本人は英語になっても名前は変わらないので驚いたが、ベトナム名を聞いてみると確かに発音がとても難しかったのでアメリカ名があることに納得した。

お母さんはアメリカでポピュラーな食事も作っていたり、みんなコーヒーが好きだったり、旧正月もお祝いしたり、とアメリカとベトナムの文化が上手く共存しているようだった。

休日の1日目にディズニーワールドにホストファミリーとホストシスターの友達と行った。マジックキングダムに行ったので日本と同じようなものが多くあったが、光景は日本のディズニーとは全然違ってわくわくした。オランダに来る前から行きたいと思っていた場所に来て嬉しかった。最後に見たシンデレラ城でのショーにはとても感動した。花火の使い方がすごく豪快で見えてとても楽しかった。



最終日に浴衣の着付けをしたり、日本のご飯を持って行ってそれでおにぎりを作ったり、少し日本の文化の紹介をした。ホストファミリーが喜んでくれたので、浴衣の着付けは少し大変だったけれどやってよかった。ホストファミリーは色々な言葉を日本語ではなんと言うのか、なども聞いてくれたりと日本に興味を持ってくれていた。今度日本に行くつもりだと言っていたので、機会があればぜひまた会いたい。

アメリカでも家庭によるかもしれないが、私のホストファミリーはみんな仲が良く、晩ご飯は必ず全員で食べていた。お父さんの帰宅がとても早く、平日の家族全員で過ごす時間が長いように感じた。もちろんホストシスターは課題が多くて部屋で勉強している時間も長かったけれど、みんなが家族の時間を大切にしているとても素敵な家族だった。

ホームステイ中はもっと英語で話せたり聞き取れたりできたら、と思う時もあったが、ホストファミリーが私の言葉を聞こうとしてくれていたのでみんなとコミュニケーションをとることが出来た。本当に温かい家族に出会えて良かった。

私にとって今回は人生で初めてのホストステイだった。お泊まり1日だって仲良しの友達とするだけなのに、見ず知らずの他人と10日間を共に生活をするなんて出発前は全く想像がつかなかった。私のホストファミリーはインド系の方で父母娘の3人家族、両親はIT企業に勤め、娘も理系（アメリカでは文系理系という分類はないが）科目選択というエリート一家だった。高校生を受け入れるのは初めてだったらしいが、手厚く歓迎してくれて、快適で楽しい10日間を過ごすことが出来た。ベジタリアンの家だったので家でお肉を食べることは無かったが、インドカレーやインドチャーハンなどとても美味しくお肉が恋しくなることもなかった。

両親は食事を素手でとって、文化の違いを感じた。宗教はヒンドゥー教ということで家の中にも関連の置物や壁紙があり、自分の家とは全く違う雰囲気を楽しめた。ホストシスターは明るくておしゃべりで可愛くて親切な子だった。たくさん面白い話をしてくれていたのに気の利く返しが出来ず少し悔しかったが、最初は緊張していたホストシスターも会話をしていくうちにだんだんと緊張が解けて話が盛り上がった。

彼女は学校にも友達が多く、すれ違う生徒に度々私を紹介してくれた。おかげで高校内でも話せる子がたくさん出来た。学校から出る毎日の課題が多く、生徒会でのイベント準備もあり、学校でも家でもとても忙しそうにしていた。私と彼女は同じ高校生でも、朝早く家を出て、夜遅くまで課題に取り組み、私よりも1日の稼働時間が長かった。

ホストファミリーと過ごす中で最も驚いたことは、家族愛の深さだ。ホストシスターとホストマザーは離れていても頻りに電話で連絡を取っており、毎日“love you”を欠かさず伝えていた。お互いがいないところでも私の前でお互いを褒めていて、家族愛を感じた。ホストファザーは毎晩インド映画を見るのが習慣だそうで、毎晩リビングでインド映画を観ていた。こんなにも人を虜にするインド映画に挑戦してみようと思う。ホストマザーは私も本当の家族の一員のように扱ってくれて、常に気にかけてくれていた。娘がもう1人増えたようでとても嬉しい、あなたがうちに来てくれて良かった、と毎日のように伝えてくれて嬉しい気持ちになった。私も家族にもっとオープンに感謝と愛の気持ちを伝えようと決めた。

初めてのホストステイでは違う国の、違う家族の、日常に紛れてたくさんの違いに驚きながら幸せな時間を過ごせた。アメリカだけでなくインドの話もたくさん聞けて、有意義な異文化交流が出来たのではないかと思う。この家にホストステイ出来て幸せだ。



ホストファミリーとの交流

渡邊 柚菜

私はホストと会う時、楽しみという気持ちよりも緊張していた方が強かった。しかし、私のホストファミリーは私を見つけたときに、笑顔で迎え入れてくれた。このとき、私は緊張がすぐにほぐれた。車の中で見慣れない広い町をみて、口が開いていたのを覚えている。ホストファミリーの家は、日本ではありえないくらい大きな家で驚いた。彼女たちは、ロシア系の方で親子喧嘩をするときはロシア語で話していた。私はさすがにロシア語まではわからなかったので、理解はできなかった。しかし、表情や動作で「こういうことを言っているのかな。」というようなことはわかった。その時、「言葉がわからなくても、その人の動きで何かを感じられることはすごいな。」と改めて思った。

また、ホストマザーは私にたくさんの国のご飯を用意してくれた（ロシア料理、メキシカン料理、イタリアン料理、日本料理など）。ホストファミリーと一緒にいる時間は少なかったが、彼女たちと過ごした休日はかけがえのない思い出となった。私は、土曜日にUniversal Studio Floridaに行かせていただいた。Universalにはホストシスターとその友達2人と行った。もちろん、日本語を話せる人はいなかった。なので、自分がうつむいてしまうときもあった。



しかし、それに気付いて話しかけてくれたり、アメリカについて教えてくれたり、色々なことを私のためにしてくれた。「I'm sorry. I'm too much talk with my friends」と、ホストに声をかけられる事もあったが、「自分が話さないのが悪いな。」と反省した。

でも、本当にいい時間を過ごせたと色々な事を共有することができたので良かった。

次の日は、ホストシスターとほとんど2人だけでSea Worldに行った。



ジェットコースターに並ぶときや、ご飯を食べるとき、沈黙が続いたときもあった。けれども、「この機会を無駄にしてはいけない。」と思いながら、自分から勇気を出して話しかけたのを覚えている。もし、この一歩が踏み込めていなかったら、今ごろ後悔で埋め尽くされていただろう。

Sea Worldに行った後は、ホストシスターと友達とショッピングに出かけた。彼女たちの遊ぶ場所は、ほとんどのこのショッピングモールだと言う。「日本人の高校生と似ているな。」と感じた。家に帰ると愛犬のパーシャが毎日出迎えてくれた。彼女をみるともっと頑張ろうと言う気になった。

そして、お別れの時、悲しい気持ちが込み上げてきた。でも、「またどこかで会える。今日が最後じゃない。」と私は思ったので、涙は流さなかった。彼女たちと過ごした7日間は一生涯の思い出だ。この研修に参加して本当に良かったと思っている。ホストファミリーには、感謝でいっぱい。今後も、彼女たちと交流を続けていきたい。

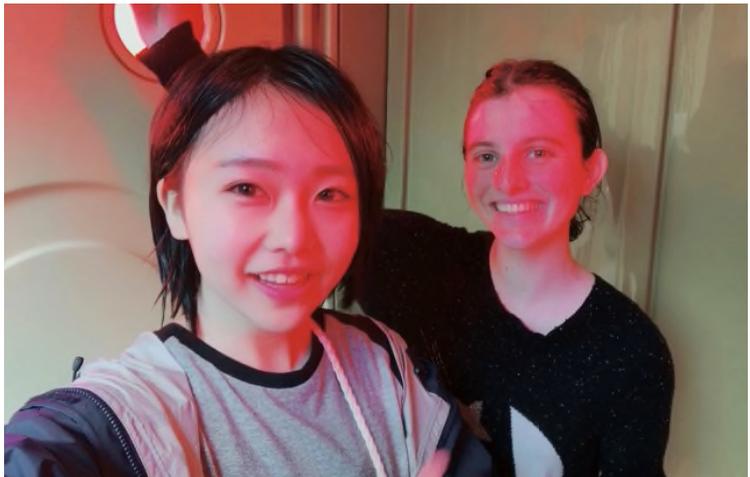
私のホストシスターであるエマは日本が好きな、明るくて優しい1歳年上の女子高校生である。会う前に何度か連絡をとってはいたものの、実際に会うとなるとすごく緊張したのだが、空港で”Wakana”と書いてデコレーションしてくれた幕と、エマとお揃いのマナティーのキャップを用意して出迎えてくれた。エマの妹のクリアと、マザーのミナも一緒に、家に向かう車はとても賑やかで初めから楽しい気分ですスタートできた。ホストのお宅はゲートコミュニティという、一つの住宅街がホテルのような大きなゲートで守られた一角にあり、リゾート感漂う建物だった。エマは日本のアニメが好きで、以前オランダの高校生が浦安を訪問するプログラムに参加したときに、秋葉原を訪れたことや美味しかった日本料理のことなど、写真を見せながら楽しそうに話してくれた。家についてすぐ日本からのお土産でお菓子を渡すととても興奮して喜んでくれた。日本のお菓子はアメリカでも売られているのだが、とても高いと聞いた。

エマとは一緒に高校の授業に参加させてもらったり、休日にはユニバーサルに連れていってもらったり多くの時間を一緒に過ごした。エマは本当に日本が好きで、家でも日本語の勉強を頑張っていたので、時々一緒に日本語の勉強をした。そのひたむきな姿に触発されて、私も英語の勉強を頑張ろうと思った。妹のクリアは中学生なのにすごく気の利く女の子で、エマがバイトで家にいない時には私が退屈にならないように一緒にゲームをしてくれた。

マザーのミナはいつも優しく、毎日のように用意してくれる水筒とお菓子にかわいい手描きの絵を添えてくれた。いつも違う動物を描いてくれて、今日は何の動物だろうと見るのが楽しみだった。エマの友達も優しい子たちばかりだった。1日肌寒い日があったのだが、寒がっていた私を気遣って自分のジャケットを貸してくれた女の子や、毎回授業で会うたびに声をかけてくれる子もいた。渡米する前は、差別を受けるかもしれないという不安はあったが、意外にも日本に興味がある子が多くて嬉しかった。

こんなに温かい人たちに恵まれて私は幸せだ。この出会いを大切に、この先も交流したいと思うし、東京オリンピックが開催される2020年には、是非ホストファミリー全員揃って来て欲しいと思っている。

エマ、クリア、ミナ、そして仲良くしてくれたエマの友達、素敵な時間を共有してくれて本当にありがとう。



(3) 内容別報告

URAYASU ナイト

佐藤 美羽

浦安ナイトは私達派遣生が最も力を入れていたイベントの1つである。日本の文化を自分達のホストファミリーやドクターフィリップス高校の生徒に向けて発信した。

このイベントは、昨年の秋から長い時間をかけて準備して来たものであった。プレゼンテーションとパフォーマンスを3つのグループに別れて日本の高校生の一を紹介したり、武道や原宿のカルチャーを発表した。これらは全て自分達で出した案に市の職員の方々や浦安在住外国人会のパトツィアさんの意見を取り入れながら企画を決定し、具体的な実行方法や英文まで自力で用意した。

準備段階では、「私達の拙い英語をネイティブの方々には理解してくれるだろうか。」「もし自分達の発表が全く面白くないと思われてしまったらどうしよう。」「質問が来ても答えられる自信がない。」などの不安要素が沢山あった。

私は日本の文化を紹介するグループに所属していたのだが、私達のグループが一番苦戦したのは、パフォーマンスの説明方法であった。

日本の伝統的な手遊びである茶摘みを、茶摘みの文化自体がない外国人にどう伝えたら良いのかとても悩んだ。また、手遊びの動きが少し複雑だったため、30分という限られた時間の中で覚えて楽しんでもらえるのかという不安もあった。派遣生同士のスケジュールも合いにくく、リハーサルも充分に行えたかと言えばそうではなかった。

しかし、本番ではどのグループのプレゼンテーションも興味深いものになっていて、浦安ナイトに来てくれた私のホストファミリーもとても面白かった、と言ってくれた。不安だったパフォーマンスも、私達が考えていた以上に受け手の吸収が早く、ものの10分ほどで、きゃりーぱみゅぱみゅのダンスや茶摘みの手遊びを覚えてしまう人もいた。ゲームやダンスのパフォーマンスはどのブースも非常に盛り上がっていた。私達の英語は決して上手いものではなかったが、聞いている側が真剣に聞こうとしてくれるのが本当に嬉しかった。始まる前は1時間以上も浦安ナイトで時間を使えるのか本当に心配だったが、終わる頃にはもう少し時間があたらよかったな、と感じるほど充実した時間になっていた。

浦安ナイトのような文化交流イベントが、もっと様々な場所や場面で行われると非常に楽しいのではないかと感じた。浦安ナイトを通して学んだ企画立案から本番実行までのプロセスは、これからも役に立つのではないかと思う。

ドクターフィリップス高校での授業体験を通して、私自身、協調性と創造力を持ち合わせた、グローバル社会で必要とされる人材となり、世界を舞台に飛躍したいと思索した。

日本とアメリカの教育システムと人間性の違いから比較する。

最初に、教育面では、アメリカは、クリエイティブなアイデアを創造することに重点を置いているように感じた。このように考えるに至った理由は 4 つある。

1 つ目は、自由な校風である。授業中の飲食や自由な発言が許可されており、休み時間には、教室の黒板がスクリーンとなり教室が映画館に変わることもあったことだ。

2 つ目は、選択授業が多いことであり、自分で自分の取りたい科目を選択し、自分の関心があることを思う存分に学べる環境が整っていた。自分の意志で選択することから、自分自身への責任も重く、留年も多々あることから、真剣に学ぶ体制が整えられることが選択授業というカリキュラムの利点であると考察した。

3 つ目は、授業が参加型授業であることだ。生徒全員が授業終了時に発言することが何度もあり、また、間違いを笑う人はおらず、自分が納得できるまで先生や生徒同士で議論し、授業中に寝ている生徒は一度も見たことはなく、生徒 1 人 1 人が自分の視野を広げ、知識を増やそうと積極的に取り組んでいた。

4 つ目は、最新テクノロジーを導入した授業だ。全ての教室に電子黒板があり、生徒全員はパソコン又はアイパッドのような電子機器を持っており、効率よく、且つわかりやすく先生も生徒も使いこなしていた。

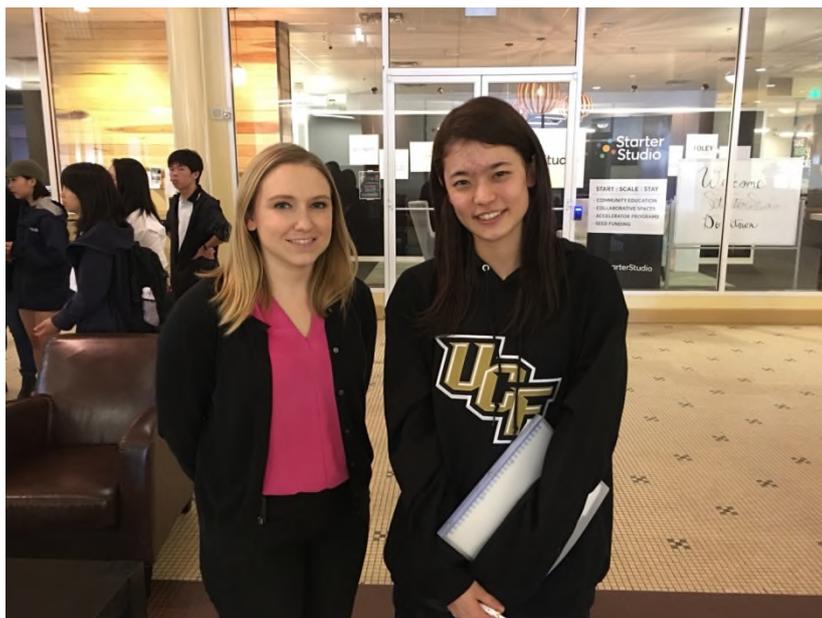
一方、日本の教育環境では、協調性を重視していると感じる。理系又は文系を選ぶことは出来るが、大方のカリキュラムはすでに決まっており、また発言も特定の人ができることから、受け身の姿勢であると考ええる。加えて、様々な厳しいルールが学校内や授業内にあり、授業の初めと終わりには必ず号令があることやクラス内のホームルームがあるように統一性を重んじていることも特徴である。さらには、授業よりも部活を中心に活動している生徒も少なくなく、学問がおろそかになってしまっていることもある。

人間性の面から考えると、アメリカ人は、個々が独立しており、自分らしく自分で自分の居場所を構築しているように感じた。このように思索したのは、多文化の人とのコミュニケーション能力が高く、自己主張が強いことから感じた。加えて、生徒 1 人 1 人の個性が強く、且つアメリカ人はそれぞれが持つ個性を寛大に受け入れていた。だからこそ、日本人の私が授業に入った際にもフレンドリーに積極的に話しかけてくれ、多文化を受け入れ、また強く興味を示してくれていたと考える。

日本人の特徴としては、人への細かな気遣いをし、周りからの評価を大切にすると感じる。比較的謙虚で控えめで優しい人が多いと感じる。一例として、褒められた際に感謝することよりも、謙虚に受け止め時にはへりくだることだ。また、プレゼントを渡す際のラッピングなど、細かい気遣いは、

他国でも絶賛されている特徴であると再確認した。日本人学生の間では、自分自身が所属するグループ、コミュニティへの評価を大切にしていると思える。

このように多方面から様々な相違点がある中で、私自身、日本人としての誇りを持ち、日本人にしかない繊細な部分を自分自身のオリジナリティとして強みとし、他国の文化を吸収し、将来、広く活躍する国際人になりたい。

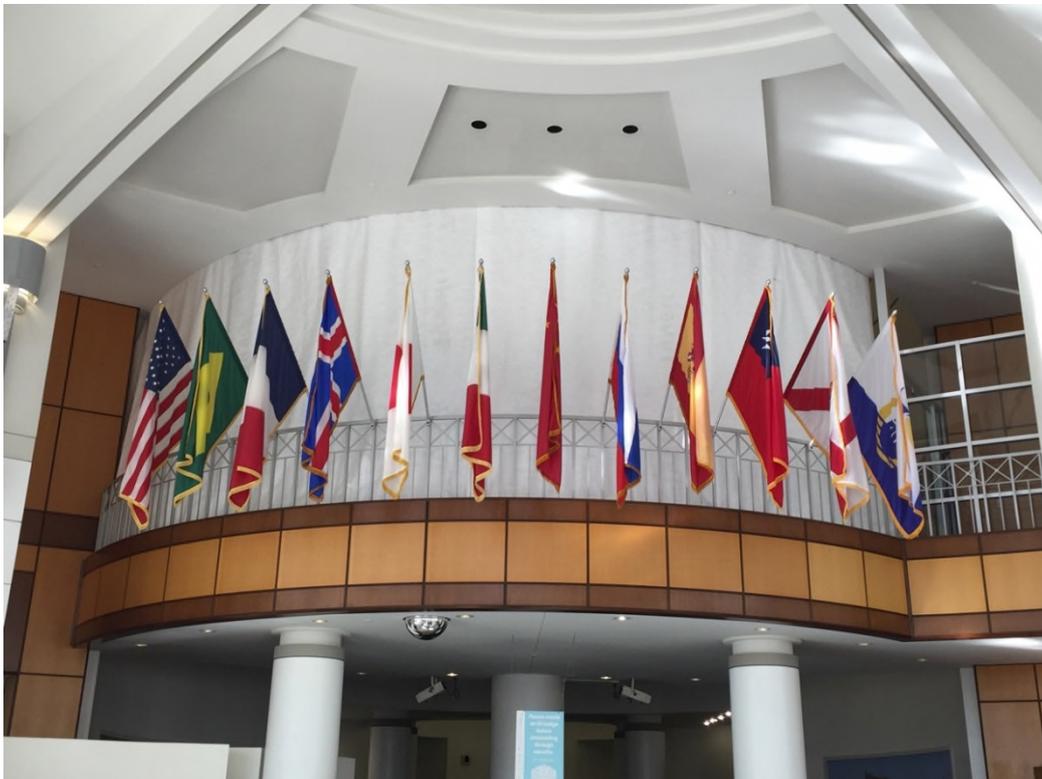


今回私はオーランド市役所について調べた。オーランド市役所は、ドクターフィリップス高校からバスで約30分程の市の中心にあった。建物は新しく綺麗で、天井にはオーランド市と姉妹都市である場所の国旗が飾られていた。ガラス張りのホールは太陽光だけで十分なほどの明るさだった。一見なんの変哲もない綺麗なオーランド市役所だが、日本・浦安の市役所と大きく違う点が1つある。それは、オーランド市役所には、入館する際に空港のようなセキュリティチェックがあることだ。実はこの厳しいセキュリティチェックは、市役所だけではない。大きなショッピングモールやテーマパークでも行われていた。911以降のアメリカがどれほどテロに対し警戒しているかがわかる経験だった。

事前学習で市役所について調べた際に、日本とアメリカの市議会議員の数が大きく違うという記事を見つけ、非常に驚いた。実際にオーランド市役所で質問して見たところ、オーランド市議会議員は議長である市長を含め、たったの7名しかいないそうだ。浦安市の市議会議員21名と比べて3分の1のしかない。しかし、人口はオーランド市の方が多いいのだ。市の職員(公務員)自体は4,500名と浦安市よりも少し多くなっている。また、オーランド市には700名の警官、450名の消防士が在籍しており、治安維持に勤めている。オーランド市は非常に豊かな地域であるため、病院の運営やごみ処理などの公共サービスも提供している。教育に関しては、日本では市区町村の管轄だがオーランド市の学校はカウnty(日本でいう県)の管轄だ。

また、オーランド市役所のホールの一角にはオーランド市役所の歴史に関する沢山の資料が飾られていた。映画の爆破シーンに使われた旧庁舎の写真や、オーランドの姉妹都市が持つ鍵の展示があった。

しかし、一番私の印象に残ったのは、フロリダ銃乱射事件に関する展示である。この事件は、2016年6月12日にフロリダ・オーランドのナイトクラブで起こった銃乱射による事件である。犯人を含めた50人もの人々が亡くなり、多くの人々が負傷した。このとき、標的がLGBTs(同性愛者)の方々だったことが大きな問題になった。この事件は世界中で同性愛者などの性的マイノリティに対する差別について改めて考える重大な契機となり、オーランド市役所に対し世界各地から性的マイノリティを支援する虹色の贈り物が届けられた。虹色はLGBTsを示すシンボルカラーであるからだ。この事件はオーランド全体を団結させ、性的マイノリティへの差別をなくそうと以前にも増して皆さん努力なさっているそうだ。911や銃乱射事件などの痛ましい過去をただの歴史として保存するのではなく、それらに対する問題意識を持ち続けることの大切さを学ぶことができた貴重な体験であった。



いくつか施設がある中で、私はUCF(University of Central Florida)という大学を担当することになった。UCF は1963 年に設立された大学で、2013年に学生総数6万人を超えて、アメリカ合衆国で第1位となっている。この大学は日本の大学とは比べものにならないくらい規模が大きく、驚いた。

まず大学の敷地内に入ると、すごい量の車が停められている駐車場があった。アメリカでは16歳から運転免許を取ることができるので、高校にも大きな駐車場があり、多くの高校生が車で通学していた。また、ほとんどの学生が家から高校まで行くのに車で30分ほどかかることを知った。日本の大学生は車ではなく電車やバスなどを使って大学へ行く人がほとんどなので、ここでも文化の違いを感じた。

大学内を案内していただくためにウェルカムセンターという建物に入った。すると、ホテルのロビーのようにソファーやテーブルなど、くつろげるようなスペースがあり驚いた。またインフォメーションセンターのようなところがあった。大学とは思えないようなきれいでリラックスできる場所だった。大学の敷地内は公園のように自然豊かで、たくさんの学生がいた。ベンチに座って友人と話している人、本を読んでいる人、セグウェイに乗って移動している人など個性であふれていた。また、とても大きい図書館や、何かイベントがあった時に使える、とても広いスペースなどがあった。見学に行った際は工事中のところがたくさんあったので見られなかった建物もいくつかあった。

UCFにマスコットキャラクターがいたことにとっても驚いた。そのマスコットキャラクターは黄色で盾を持っているとてもユニークなキャラクターである。アメリカ人はスターバックスコーヒーが大好きなのでUCF 内にスターバックスがいくつもあった。お昼に学生が食べるファーストフードのような手軽に買えるお店がたくさんあった。また食べ放題のお店もあり、多くの学生で賑わっていた。



奥の方に行くと、洋服や小物などUCFでしか買えないグッズがたくさん売っているお店、企業として研究開発をしているところなどがあつた。その付近の雰囲気は大学の勉強メインの建物とは少し違って、ショッピングセンターに来ているような感じだつた。企業としての研究開発の例としては、子供用の義足や義手などを作るところである。子供のために作るものなのでスパイダーマンの柄のものやスーパーマンの柄のものなどの子供が喜ぶようなもの作りをしていた。

アメリカの大学は日本の大学に比べて入学するより卒業する方が難しいので日本よりも学生数が多いと考えられる。なので、自分が入りたい大学に入りやすいということも考えられる。授業ではない時間には外でバスケットボールをやっている人たちがいた。自分の好きなことを好きな場所でできるのは本当に良いことだなと思った。

今回オーランドのUniversity of Central Floridaに行ってみて、私も自分が行きたい大学に行って、学びたいことを楽しく学びたいと思った。そのためには今から勉強をしっかりとしてどの大学に行っても大丈夫なくらいの学力を身につけていきたいと思った。

今回は大学の授業の様子を見られなかったけれど、ここで学んだことを参考にしてこれからの進路を考えていきたいと思う。



私たちは、Beardall Senior Centerという介護施設を訪問した。想像よりも歴史のある建物で、シニアの方々はとても元気に見えた。日本の一般的な介護施設の入居条件は60歳もしくは65歳以上の方だが、Beardall Senior Centerでは55歳以上の方から入居できることになっている。この時点で既に日本の介護施設と違いがあることがわかった。そこで、私はBeardall Senior Centerのスケジュールの中でクリエイティブな内容のものを紹介したいと思う。

まず、ほぼ毎週土曜日の朝にシニアの方を集めてランニングなどを行い、体を鍛えているということだ。私は、浦安市にある介護施設の舞浜倶楽部に訪問させて頂いたが、「舞浜倶楽部ではスウェーデン発祥の音楽ケアを用いて生活に豊かさや楽しさを創出している」ということをお聞きした。Beardall Senior Centerと舞浜倶楽部の比較になってしまうがBeardall Senior Centerは活発で筋肉を使ったトレーニングが多いことがわかった。

また、実際には見ることはできなかったが、フィットネスセンターも設備されているようだ。

そして、第3水曜日にはクッキングクラスを開いていて、ヘルシーなものを自分自身で作って食べるということも、介護予防・認知症予防になると仰っていた。私たちが訪問した際にも、クッキーを焼いてくれた。



自分は、遠慮をしてあまりクッキーに手を出せなかったが、シニアの方は「食べて、食べて。お客様なのだから。」と優しく声をかけてくれた。帰る際には、「余ったクッキー持って帰っていいよ。」と言って、たらふく持って帰っている派遣生もいた。本当に美味しく、感謝している。

また、私が1番驚いたことは、Beardall Senior Centerは元々学校だったそうで、当時学校に通っていた方で、今このBeardall Senior Centerに通っている方もいらっしゃるということだ。「古い建物を大切にしている、ということもシニアの方が元気でいられる理由なのかもしれない」と仰っていた。

また、シニアの方々と一緒にダンスをさせて頂いたが、とても楽しい経験になったと思う。シニアセンターの利用者の方々は「私たちと交流をして楽しむことができるのか」と不安に思っていたようだ。しかし、私達は楽しい気持ちでいっぱい時間が早く過ぎてしまったように感じた。

また、シニアの方のダンスとは思えないくらい、ハードなもので少し驚いた。自分が止まったり、間違えたりすると、両脇にいたシニアの方がポイントを教えてくださった。オーランドという地域は本当に優しくて温かい場所だと改めて実感した。

また、URAYASU NIGHTやBoys and Girls Club of Americaで発表させて頂いた、“茶摘み”や“英語のラジオ体操”を披露した。シニアの方々は、本当に楽しそうに参加してくださった。茶摘みでは、ペアになってコミュニケーションをとり、貴重な経験をすることができた。お互いに間違えたり、成功したり、教えてみたり、小さなことかもしれないが、一歩成長した気持ちになった。

また、シニアの方の中には、浦安のベイシティーマラソンのTシャツを着ている方もいて、浦安のことを知ってくださっていることを直接感じることができ、嬉しかった。今後も、浦安とオーランドとの関係がより良くなることを願っている。

私は OUC (Orland Utilities Commission) の施設や太陽光発電、再生可能エネルギーについて調べ、2つの視点からこの施設を見た。1つ目は、主に太陽光発電所についての視点。2つ目は、オーランド市との関係など施設についてである。



まず1つ目に太陽光発電所の視点である。太陽光発電にはいくつかの種類がある。例えば日本では、個人が所有して屋根などに取り付ける小規模なパネルで自分の家の電力を賄うものが一般的だ。アメリカではメガソーラーと言われる大規模な太陽光発電所から電力会社が供給する電気を買う、という制度も多い。また近年アメリカをはじめ注目されているのが、コミュニティーソーラーという仕組みだ。これは大きなパネルの一部を個人が買って自宅にソーラーシステ

ムがあるかのように利用できるものだ。また、この仕組みのパネルは実際に OUC でも見たように、ちょっとした駐車場など色々な所に設置ができる。これにより、日照や資金の理由で家にソーラーシステムを設置できなかった消費者も自宅ではなく地域社会（コミュニティー）に自分のソーラーを持つことができる。オランダは日照時間が長いから確かに太陽光発電には適していると言える。

だが、パネルの設置には資金の問題がある。しかしこの仕組みだと、例えば OUC では他の電力の価格変動に関わらず 20 年間一定の価格だという。加えて普及や開発が進むほどその価格はより安くなる。加えて、日本ではマンションやビルで日光が遮られたり、そもそもの国土が狭い。その中で太陽光発電をもっと普及させるにはこのコミュニティーソーラーを日本でも多く導入するべきだと思う。

もう一つ、太陽光発電の設置についてフローティングソーラーを紹介したい。これは OUC で初めて見たものだが、水上にソーラーパネルを浮かべている。このメリットは設置が簡単なこと。実際に試行的に OUC は 32KW 分を 2 日で設置したという。さらにこれを貯水池などで使うと新たに森林を伐採する必要もない。しかもこのパネルが周囲の気温を下げたり、パネルから水面に反射しまた発電することができ、とても効率がいい。このような設置方法の導入も日本には必要だと思う。

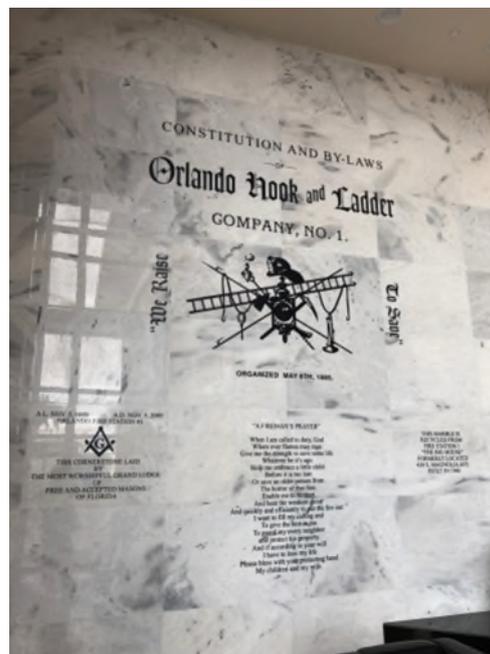
さらに加えて、その発電した電気を貯蓄する技術がもっと進めば太陽光発電も促進される。OUC で言われ、誇りに思ったが、日本はパネルの生産も力を入れているので、さらに研究を進めてほしい。太陽光発電は日本でも、これらのような設置方法や仕組みを活用すれば、もっと普及すると思う。

2 つ目に施設としての OUC についてである。この施設は市からは完全に独立してオレンジカウンティの管轄ではあるけど市と連携をして、2050 年までに全市 100% 再生可能エネルギーを目指しているという。この施設は太陽光発電の発電所という意味だけでなく、研究や開発で試行錯誤を繰り返している。オフィスは創造的で快適そうで、派遣団の大人達も羨ましがれるほどだ。また電力事情として日本と大きく違うのが、アメリカでは電力をより自分で選ぶことができるということである。そのため、住民が自ら進んで参加していかないと 100% 再生可能エネルギーの目標は達成できない。だからこそ OUC では技術開発だけでなく、まずコミュニティーに理解してもらうために、コンクールを行ったり、何よりも対話を大事にしたいという。

OUC のエンジニアが言ったように、確かにこの目標は大きな挑戦かもしれない。それでも、熱心なエンジニアたちによるこれからの技術の開発と、対話で住民の自主的な参加を重んじる OUC の考え方があればこの目標は達成できると思うし、達成してほしい。そして、この技術や考え方を日本でももっと取り入れていくべきだと感じた。



オーランドには17の消防署が存在するが、今回は、その中のステーション1の見学をさせて頂いた。施設を訪れると、まず赤や黒を使った消防車が目に入る。しかし、それは日本の消防車よりも大きく、また見た目の格好良さに圧倒されるほどのものであった。



入り口には、大理石のタイルが壁に埋め込まれているが、これは前のステーション1の建物からそのまま持ってきたものである。その横には、かつてボランティアとして消火活動に参加する人々を呼び集めるために使われていた鐘、そして911の際までワールドトレードセンターの建物を組み立てていた鉄の部品が展示されていた。さらには、かつて消火活動を行なった時の写真もたくさん廊下に飾られていた。“The Big House”という呼び名を持つステーション1であるが、1885年から続いているオーランド消防の伝統と歴史の重みを感じられるところであった。

また消防署の上には雨水を集めるタンクがあり、その集められた水はトイレを流す際に使われるなど、再利用しているという。前の施設の大理石を使っていることもそうであるが、人の命を救命活動で助けるのみならず、環境に配慮して間接的にも守ろうとする姿勢はとても感銘した。

消防署内での昼食は実際に消防士さん達が使われている食堂でいただいた。そこには大きなキッチンがあり、いつもシフトを決めて消防士さんら自らが全員分のご飯を作り、皆と一緒に食べているということで私たちもその料理を食べさせてもらった。その日のメニューはタコスなどがメインであったが、本当に美味しくて驚いてしまった。そして、皆さんが仰る様に、チームワークが大切になる職業であるので、チームとしての信頼関係を築く上で、このように自分

たちでご飯を作り全員でコミュニケーションをとりながら食べるということは大変大事な習慣であるという。

今回密かに気になっていた、UFO に遭遇した際のマニュアルについてはオーランド消防署にはないそうで残念ではあったが、もう一つの消防士カレンダーの発売については事実であった。だが詳しく聞いてみると、それは警察とともに非営利として作っているもので、レスキューされた犬との写真がメインであり、その売上金は支援などに使われるのであった。

アメリカでは、交通手段には車を使う生活、文化であるため、オーランドでも渋滞の多さが問題になっている。その様な中、オーランド消防署は自転車を使うなどして到着時間の短縮を試みる等様々な努力をしている。そのためオーランド消防署は全米でも ISO 1 にクラス分けされている。ISO の次の数字は 1 から 10 までであり数字が低いほどレベルが高いとされる。オーランドはこの ISO 1 に選ばれるのが 10 年目であり、これはアメリカ全土でも 1 パーセントの割合にも満たないほどであるようだ。これらのことから消防署の皆さんの日々の訓練のご苦労が伺える。

今回オーランド消防署のステーション 1 の見学を通じて、終始消防署の皆さんの温かさを感じることができた。私たちが施設に訪れた時から、何人もの方たちが笑顔で歓迎して下さい、またいろいろなお話をして下さい。大変忙しい中であっただろうが、写真撮影の時も、沢山の人がわざわざ私たちのために時間を割いて、重い防火スーツを着て見せてくれたり、実際に車の中を見せてくれたり、サイレンから出動するまでの演出をしてくれたり、ご飯を作って食べさせてくれたり等々、本当にたくさんの温かいおもてなしをして下さい。皆さんのお陰で私たちは充実した見学ができた。私は以前、どうしてアメリカの消防士さんは市民からヒーローとされるのか疑問であったが、実際にお会いしてみて、こんなにも人々に対する優しさを持ち、毎日働いて皆を助けてくれる消防士の皆さんはまさにヒーローそのものだと納得することができた。

本当に消防署の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいである。ありがとうございました。



History Center 熊川 和香菜

ヒストリーセンターでは、ボランティアの方の詳しい説明と様々な展示品や資料のおかげで、オーランド市を含むフロリダ州オレンジ郡の自然や歴史について深く学ぶことができた。



まず、説明を受けたのはオレンジ郡の水事情についてであった。フロリダでは洗車、料理で使う水、洗濯水など生活で使用するすべての水は地下水を利用しているそうだ。夏は雨季で雨がたくさん降るので、地下水の侵食によって地下の岩石が崩壊し、地表にまで到達するシンクホール（穴）が発生すると聞き驚いた。家や車やプールまでもが飲み込まれてしまうという事件が過去にあったそうだ。

次にこの地域の1万2千年前の先住民、インディアンのティムクワ族から現代までの民族を中心とした歴史の説明を受けた。貝塚をもとに先住民の生活を研究していて、施設の中には彼らの生活の様子が表された展示がたくさんあった。



インディアンたちはカヌーで漁に出ていたとのことで、ハリケーンによる洪水が去った川で当時使っていたカヌーが発見され、施設内に展示されていた。実際に見てみるととても幅が狭く、バランスを取るのが難しそうであった。

ティムクワ族のところにやってきて良い関係を築き上げた他民族はスペイン人であった。彼らは豚や家畜、オレンジを持ち込み、ティムクワ族は生活の仕方を伝授するなど協力しあって生活を共にしていた。この頃からオレンジ栽培が盛んになったようで、フロリダでは今でも大きな産業となっている。しかしスペイン人は決して良いものだけを持ち込んだのではなく、伝染病も持ち込んでしまったため多くの先住民が亡くなったとのことである。

18世紀になると新たなインディアンが登場した。セミノール族である。家畜である牛が当時の開拓者たちとの論争の的になったそうで、彼らは3度のセミノール戦争を起こした。ちなみにフロリダでは現在でも牛の存在は重要で、最近まで全米3位の牛飼育数を占めていたと聞いた。厄介扱いされていたセミノール族はアメリカ政府からの討伐を回避するため、マイアミへと逃げていった。

また、フロリダの柑橘類産業にも歴史がある。例えばアレンという男性が柑橘類を効率よく収穫出来るように、袋の底を自在に開閉できる袋を開発した。

”Allen Picking Bag”と称されたその袋は今でも柑橘類産業で使用されているそうだ。他にも私たち派遣生に馴染みのある名前のドクターフィリップスさん（ドクターフィリップス高校を訪問したので）は、オレンジジュースの加工工程を開発し、腐りづらいオレンジ作りに大きく貢献した。汽車が発明されることにより柑橘類は市場に運びやすくなり柑橘類産業は順調かと思われたが、1894年から1895年にかけてフロリダを襲った大寒波の影響を受けてビジネスは一時撤退してしまった。寒波を避けるため、栽培地は徐々に南方へ移動し柑橘類産業は成長を続けたそうだ。今日、オレンジの生産ではブラジルに次いでフロリダが世界第2位、グレープフルーツでは世界最大の産地となった。



私はオーランドという市名の由来について興味を持ったので質問してみると、これにはいくつかの説があり、どれが本当かわからないと言われた。例えばシェイクスピアの『As you like it』（「お気に召すまま」）という本に出てくるキャラクターから取ったとか、牛のキャラバンを引き連れていたオーランドさんという方が虫垂にかかり、倒れていたのを発見された場所がオーランド市内だからなど、様々である。そして現在公式的な由来と考えられている説は、“Orlando Reeves”という兵士が番を張っているときにセミノールインディアンが侵入し、矢によって殺されてしまったというものだ。インターネットで調べても出てこない情報が得られたので、質問して良かった。

現在のフロリダやオーランドの姿だけではなく、その地域の歴史を学べる施設を訪れたことで、より深い交流を得ることができ、大変興味深い体験となった。

CANVS 千田 ももこ

CANVS は、エネルギーでこれからの社会を創る原点のような場であり、創っている人々を含め、周りの人々をわくわくさせることができる創造的な場所であった。そこでは、社会構造として、起業することを考えている人々を受け入れる体制が整っていることが重要であると痛感した。そこで、私自身、発信することを通じて、多くの人々と繋がり、社会を創る一員として、向き合いたい。

CANVS という会社は、非営利団体で利益を追求する会社ではなく、将来的に会社を立ち上げようとしている人々、これからさらに会社を成長させようとしている会社に対し、無料でリソースを提供し、それらの会社の手助けをする団体だ。3年前に設立し、当時は3つの組織として分かれていたが、私達浦安市の派遣団体が訪れる2週間前に、それら3つの組織がより良いサービスを提供するために合併した。また、3つの場所に設立しており、その理由は、オーランド市はとても大きな市で、1つの場所にあると遠くに住んでいる人がそこへ行くことが一苦勞であり、CANVS は地元とのコミュニティを重要視したことからだ。CANVS では主に、仕事をするための環境、3ヶ月間のワークショップなどのリソース、助け合うためのコミュニティ、これら3つを提供している。現在、300名以上の利用者と150社以上の企業がCANVS を利用しており、銀行に関する手続きの手伝いや利用者同士で助け合うことも特徴であった。非営利団体の為、スポンサーとして政府や企業、教育機関からの資金、CANVS のスペースの利用者から1ヶ月7ドルもらうことで賄っているそうだった。CANVS が提供しているスペースとして、家族と話すためのプライベートルームや大人数から少人数で行える会議室、調理をする場所、休憩する場所など充実した様々な場所があった。

CANVS では、起業するための環境が整っており、互いにわからないことに対して議論をし合うことが出来る人々があり、結果的により良い社会作りを実際に行っている貴重な空間であった。利用者同士で競いあうのではなく、お互いに気持ちよく助け合うことが出来ていることから、日本人には集団主義の文化が根付いている一方、アメリカ人には個々を尊重する文化が根付いていることを目の当たりにした。

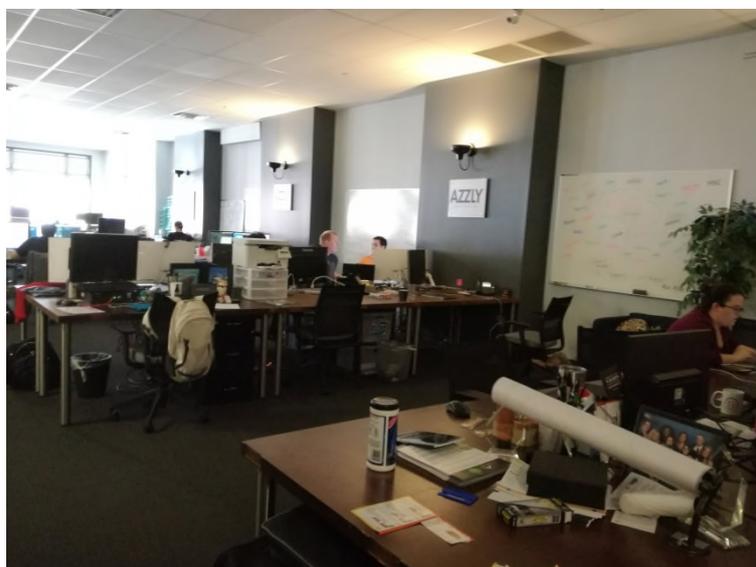
このような空間が日本にも存在すれば、より良い日本社会を構築するための第一歩を踏み出すことが出来ると確信している。ただ、現代社会において、このような空間を実現するための社会構造がまだ構築されていないことが課題であると考え。日本の社会構造の特徴の1つとして、年功序列という日本独特の人事制度そして慣習のシステムがあり、起業することに対し、世界と比較しても高いリスクが存在している。年齢に関係なく、社会にとって良いものを取り入れられるようにすることが私の理想とする社会である。そのためには、起業をするための多くの人々や会社からの信頼が必要不可欠であり、それらは、経験や経歴、実績から形成される傾向がある。年齢に関係なく、これらを構築するためには、失敗してもやり直せる社会構造が必要であり、且つ実力社会の社会構造が必要であると思案した。個々の実力を思う存分に発揮することが出

来れば、より良い社会を構築することが出来る。

より良い社会を構築するための社会の構造を築くためには、会社、そして社員1人1人が意識を変えることが欠かせない。それは、資金集めをする際に、役立つための社会作りにも繋がる。その際には、政府が政策を取り入れ、1人1人がしたいことをする社会を構築するために、1人1人が自分にしかできないことをすることが必要であると考察した。

企業しやすい社会づくり、企業が成功するための環境、そしてより良い社会を創るということを実現させるためには、CANVSのような会社の存在が必要不可欠である。

日本でも受け入れられる社会が出来、このような施設が創造され、多くの人々がCANVSで働いていた人々のような眩しい表情で未来を創っていく姿でこれからの社会を構築することに私自身も関わっていきたい。



私は Boys & Girls Club of America を訪問するにあたり、渡航前に日本と海外の学校の実態の違いについて調べた。だが、私は勘違いをしていた。この施設は学校ではなく日本で言う学童施設だった。その為、日本との違いは無くほぼ同じだった。強いて違った点を挙げるならば小学生だけでなく中学生・高校生も対象に面倒を見ていた点だろう。

私が掲げた学びたいテーマは「日本と外国 笑いの違い」であった。このテーマはプレゼンと交流で学ぶ事が出来た。私は日本語でのプレゼン能力は高いと自負している。だが、英語でやる機会はあまり無く少し不安だった。しかし、それは杞憂に終わった。言い方を少し変えたり、その場の状況に合わせたテンションで話したら子供達はとても笑ってくれた。特に「日本で好きなアニメキャラクターはいる？」と質問した時、3連続くらいで「ピカチュウ」と回答があり最後だけ初めて聞く名前が挙がり、そこで強制的に質問コーナーを終わらせると、悲観する声と共に少し笑いもあった。継続的な流れがあって唐突にそれが終了すると自然に次も同じだろうと予測してしまい、その予測が呆気なく外れる。そういった時にその流れが終わる驚きとその流れが続く時間は、その程度だったのだという呆れが合わさり、笑いが生まれるのかなと思った。

交流の時間では日本の事について多数質問をされ、中に「“Hello” は日本語で何て言うの？」という質問があった。そこで私は顔を変形させ、「こんにちは」の「ち」を「てい」に変え「は」を強く大きく発音して答えた。すると男の子達が笑ってくれて、特に1人の子はしばらく笑ってくれていた。日本でも顔や声に少し変化を加える事で笑いを取れている為、アメリカの子供達の笑いは日本と同じだなと感じた。笑顔が世界共通言語なら、それが生まれる過程も世界共通かなと思った。だが、まだアメリカでしか試せていない為、今後は他の国でも試そうと思う。

そして、この施設を訪問して1番思った事は「若い」って素晴らしいという事だ。私も16歳で「若い」に分類されるとは思うが、自分はもう年老いたと思っている。何故なら、記憶力や発想力も昔と較べると衰えているように感じるからだ。この施設の子供達は活発的で常に顔と声に生気が感じられた。興味津々で質問を多数繰り出し、私に分からない事を言語で伝えると遅いと思い、すぐに行動で示してくれた。行動の方が伝わると分かるその瞬時な発想力、そしてそれをすぐに出来る行動力に凄さを感じた。歳を重ねるにつれて経験が発想や行動を慎重に起こしてくれるがその分過去に失敗した事例を思い出し、全ての事は試さないと思う。だが、子供達は若い為、経験が浅いがその分、過去の失敗などほぼ無く様々な事を試す。1つよりも多数的に可能性を見つけていく事で最終的には1番良い所に行き着く。それと涙脆いという事も年老いたと思う理由の1つだ。歳を重ねるにつれて様々な事を経験していく。それによって起こる出来事や感情をそれと1番近い過去と照らし合わせ共感し泣くらしい。つまり、涙脆いという事は過去の経験が多いと言える。そうすると私は涙脆い為、過去の経験が多いと言える。実際、自分でも様々な経験をしてきて、日常

生活で出逢った局面と似たような場面が過去にある。この施設の子供達は涙より笑顔の方が多いのだろう。将来的には涙の数も多くなり成長していくのだろう。勝手に子供達の将来を想像してしまった。また、プレゼンの際も若さのお陰で反応がとても良くやり易かった。「良いプレゼンは良い聴衆を作る」と言うのがそれが改めて分かった。子供達は単純にその場の状況に合わせ、個人的な発言をしているだけと思っているかもしれないがとても助かった。子供達は意図せず他人の為になる事をこなしてそこに驚きを感じた。今は気が付いていないが自分の行動や言動が他人の為になっていると分かった時、彼らはどうなるのだろう。恐らく、嬉しいとは感じるだろう。それを利用してボランティアなど多角的に活躍出来る事だろう。プレゼンを行った事により子供達の将来を再び想像してしまった。

私はこの施設の子供達には幸せになってほしいと切に願った。私も昔はこの施設の子供達のように純真無垢で可愛い少年だったと思う。しかし、生きていく中でいつの間にかこの世界に対してストレスばかり感じるようになってしまった。しかし、今回この施設の子供達に出逢い、交流した事で一度きりの人生、もっと楽しもうと将来への兆しが見えた。その為、後ろ向きで臆病な私を救ってくれた子供達には本当に感謝している。



Disney's Animal Kingdom Backstage Tour

濱田 萌衣

私が担当した施設はディズニーアニマルキングダムバックステージツアーである。アニマルキングダムとは、フロリダディズニーリゾートにある4つのパークの中のひとつで、世界中のパークの中で最も広い2km²にも及び（東京ディズニーランドが0.465km²）。日本ではディズニーといえば遊園地を思い浮かべるが、なんと、アニマルキングダム内には野生動物の暮らすジャングルやサバンナが存在するのだ。ゲストはサファリツアーを通じて間近で動物達を見ることが出来る。今回私達は、ツアーでは入れないバックステージを案内して頂いた。広々とした自然の中で動物園ではなかなか見られない、のびのびと暮らす象の姿が印象的であった。

では、そもそも、なぜ、パーク内にこのような施設があるのだろうか。

約300種、2000頭以上の動物が暮らすこのテーマパークは、野生動物保護に対するウォルト・ディズニーの姿勢を反映したもので、動物の保護や教育、研究にも力を入れているそうだ。そのため、このパーク自体が動物園水族館協会に属し、徹底した管理のもと、動物達が暮らしているとのこと。研究の具体例をひとつあげると、以前ケニアで象が畑を荒らすことで困っていたところにアニマルキングダムスタッフが訪れ、象の嫌いな音を研究、その結果蜂の音が苦手だと発見し、畑に蜂をおくことでその畑荒らし問題を解決した事例がある。これはケニアの研究者から直接依頼を受けたことがきっかけらしく、その後も年に1度スタッフがケニアへ講演会を行いに訪れているそう。

なぜディズニーなのにここまでするのだろうか。みなさんは、CSRという言葉を知っているだろうか。これはCorporate Social Responsibilityの略で企業の社会的責任を意味する。全ての企業には、収益を求めだけでなく、社会に貢献する義務が課されているのだ。ディズニーワールドは、アニマルキングダムをあげた大々的な環境保護（他にも社会貢献は行なっているが）によって企業として社会に貢献している、CSRを果たしているという。日本でも、ディズニーは地域のつながりや震災被害者に対するサポートを通じてCSRを担っている。

このように、同じディズニーでも、国によって企業の社会への貢献の仕方が違うのだ。アニマルキングダムは広大な敷地のあるアメリカだからこそ実現出来たパークだと言えるのだろう。もちろん、アニマルキングダムにいるのは、動物だけではない。アトラクションやショーも素敵であった。パーク内はアジアの街並みが再現されており、ディズニーランドやシーでは味わえない雰囲気があった。時間が足りず、目玉であるアバターのライドには乗れなかったが、またリベンジしたいと思う。



Kennedy Space Center

塩見 陽花

ケネディスペースセンターは本当に広く、ディズニーワールドの5倍の広さがあるそうだ。事前に調べていたので広いということは知っていたが、実際に行ってみるとその広さに圧倒された。ケネディスペースセンターでは、主にスペースシャトル、アポロ計画の歴史について学ぶことが出来た。いろいろな種類の展示があり、アトラクションのようなものがあることにはとても驚いた。そういった展示の規模やバリエーションという点でも、日本との差を感じた。すごく感動したのは、映像を見て、それが終わったらスクリーンが開き、実際に使われていたスペースシャトルが現れてそちらの展示に進めるという仕組みになっていたことだ。楽しんで見学できるような工夫が沢山されていたので、興味がある人にとってはもちろんだが、あまり興味がない人にとっても楽しめる施設になっていると思った。



今回、ガイドの方の説明を聞きながら見学できたのですごく分かりやすかったし、展示にはないエピソードなども聞いたのでより深くアメリカの宇宙開発について学ぶことが出来た。ロケットを組み立てる時に使用する建物の大きさや、ロケットのエネルギーの大きさの話なども聞いたが、本当に大きすぎて他のものに例えられても想像出来ないくらいだったので、宇宙に関わるもの全てが非現実的なものを感じた。

また、宇宙開発そのものに関する話以外にもそれに関わった人の話なども聞いたことが良かった。アポロ計画のなかで、アポロ11号に乗った宇宙飛行士らが今まではエンブレムに名前を入れていたのに、ここまで来たのは自分たちだけではなくて今までこの計画に関わってきた多くの人の努力によるものだから、と自分たちの名前をエンブレムに入れなかったという話を聞いて本当にかっこいいなと思った。また、アポロ1号の悲しい事故の話も聞いた。命懸けという言葉が例えではないということに怖さを感じたが、そのような悲しい事故があってもアポロ計画を続けていった勇気は本当にすごいと思った。

これからの人間の活動範囲拡張の可能性として火星の研究が進められているが、現在民間企業もそれを進めているという話を聞いて驚いた。その企業の社長が車の会社の社長もやっており、ロケットを飛ばす際、ロケットの中にその

会社の車を入れて飛ばしたという話はとても面白かった。その豪快な取り組みに、日本人にはなかなか無いアメリカ人らしさを感じた。他の星を研究したことで分かったことらしいが、地球は星の寿命的に考えると、どれほどの長さなのかは分からないけれど、末期状態であることは確かだということを知った。もちろん私たちが生きている間に地球に何か起きる訳では無いが、地球が消滅してしまうかもしれない未来のために火星の研究が進み、地球以外での人間の生存が可能になるといいなと思う。また同時に、自分たちとは無関係とも思える何千年後の為の研究を進めている人々はすごいと思った。

ケネディスペースセンターは多くの人が宇宙開発について興味を持つことが出来る素敵な施設だった。私自身、見学していてとても楽しかった。宇宙開発には多くの人々の力、国際関係、また命までも関わっており、今までの大変な道のりだったということがわかった。もちろんこれからもそれは続いていくので、これからの宇宙開発について注目していきたいと思った。

13.英語による日本紹介 各グループの発表資料

Group A 中村夏花、塩見陽花、濱田萌衣、渡邊柚菜

<p>HARAJUKU</p> <p>Haruka Mei Kahana Yuna</p>	<p>Have you ever heard the word, Harajuku ?</p> <ul style="list-style-type: none">- Refers to the area around Tokyo- Center of teenage cultures
	<p>cute? Adorable?</p> <p>Colorful ty?</p> <p>Charming?</p>
	
	



Kyary Pamyu Pamyu



Group B 室井翔輝、垣内優輝、千田ももこ

JAPANESE SPORTS

YUKI KAKIUCHI MOMOKO SENDA SHOKI MUROI



Traditional sports

Kendo
Karate
Kyuudou
→Respect



CLUB ACTIVITY

- through 3 years
- STRICT
- TEAMWORK



ICHIRO

3000 hits
GOLDEN EFFORTS
3-4 years old



CONCLUSION

- SINCERE
- HARD WORKER
- DEEP BOND



THANK YOU

Group C 湯山拓海、佐藤美羽、熊川和香菜

High school life in Japan

MIU WAKANA TAKUMI

Profile

- ▶ Name: Yama chan
- ▶ Age: 16
- ▶ Track and field club

Let's look at her school life.

6:00(AM)
Get up
Get ready for school

Traditional Breakfast

7:00(AM)
Leave home

Hurry up!

8:30(AM)
Arrive at the school
Take classes

	Mon.	Tue.	Wed.	Thu.	Fri.
1	Integrated Japanese	Classics	Basic Biology	Classical Japanese	English Communication
2	English Expression	P.E	Math	Basic Biology	Classical Japanese
3	Math	Information Technology	Basic Home Economics	Math	P.E
4	World History	English Communication	Classical Japanese	Information Technology	Basic Chemistry
5	Contemporary Society	Basic Chemistry	World History	English Expression	English Expression
6	Basic Biology	Contemporary Society	Basic Chemistry	P.E	Integrated Japanese
7	English Communication		Music		

Japanese stationery

Highlighters

Memos

Erasers



12:30
Lunch Time

BENTO

"Kyaraben"

1:00(PM)
Afternoon classes

3:00(PM)
School ends

Go to Harajuku☆

Crepes

Wide variety

7:00(PM)
Get home

Dinner

Take a bath

11:00(PM)
Go to bed

14.浦安市青少年海外派遣事業のあゆみ

回	年度	派遣期間	派遣人数
1	平成2年度	12/23～1/3	15
2	平成3年度	7/29～8/9	20
3	平成4年度	7/22～8/2	10
4	平成5年度	7/23～8/3	12
5	平成6年度	7/22～8/2	12
6	平成7年度	7/21～8/1	15
7	平成8年度	7/26～8/6	12
8	平成9年度	7/20～7/31	12
9	平成10年度	7/21～8/1	12
10	平成11年度	7/21～8/1	12
11	平成12年度	7/29～8/9	12
12	平成13年度	8/18～8/29	12
13	平成14年度	8/17～8/28	12
	平成15年度	サースの影響により、安全重視のため中止	
14	平成16年度	8/14～8/25	14
15	平成17年度	8/13～8/24	14
16	平成18年度	3/21～3/30	14
17	平成19年度	3/21～3/30	14
18	平成20年度	3/20～3/29	15
19	平成21年度	3/19～3/28	15
20	平成22年度	震災の影響により、延期	
	平成23年度	3/16～3/23	13
21	平成26年度	3/14～3/21	10
22	平成27年度	3/12～3/19	10
23	平成28年度	3/11～3/20	10
24	平成29年度	3/7～3/16	10
合 計			307

